

# 水の文化

# 満水の タイ

まん

すい

タイ  
ランド



高谷好一「雨期の世界単位」

柿崎一郎「水辺空間の価値を変えた交通モード」

中島正博「水資源 開発と保全のあいだ」

スワッターナー・タダニティー

「開発におけるテクノロジーと習慣の共存」

アジアまち居住研究会「タイ中部の水辺の住いとくらし」

編集部「満水のタイ 写真紀行」

水の文化楽習実践取材

「輪中の智慧を伝えるリスク・コミュニケーション」

編集部「水を治める力」

所澤さやか「微笑みの国 タイ」

古賀邦雄 水の文化書誌「アジアの水」

# 雨期の世界単位



高谷好一 たかや こういち

滋賀県立大学人間文化学部教授

1934年生まれ。1963年、京都大学大学院理学研究科（地質学専攻）修了。理学博士。1995年、京都大学東アジア研究センターを退官、現職に移る。京都大学名誉教授。著書に『熱帯デルタの農業発展』（創文社）『多文明世界の構図』（中公新書）、『新編・世界単位から世界を見る』（京都大学学術出版会）他多数。

1960年代にはルースリー・ストラクチャー・ソサエティ（ゆるやかな構造をもった社会）という言葉が大流行でした。日本とタイの社会を比較して、J・F・エンブリーが日本はタイト（きつちりした）、タイはルース（ゆるやか）といったのです。タイ人は二人で歩いても足並みをそろえない、タイ人の部屋は乱雑だ、タイ人は日和見主義だ。タイ社会には組織がない。日本の社会に比べるとこうした特徴があるとし、だからこれはルースに構造された社会だとしたのです。タイの人たちが聞けば不快に思うようなこうした議論が盛んに行われていました。

地域研究をやっていた私たちは、なぜこうしたことが起こるのか考えました。何度かタイを歩きまわって、その答えは「それは洪水の起こり方が違っただけだ」「雨期の様子が違っただけだ」といふことになりました。

日本の雨期を見てみましょう。梅雨の雨で川は水かさが増します。すると人々は川に堰をかけ、水路で水を引いてきて稲を植え付けました。井堰や水路の建設、維持は個人では難しいから共同作業でやりました。梅雨といえば皆が一斉に出勤し、

協力して田植えをしてしまつ。それが常識でした。私の字などでは秋の台風時がまた大変でした。いつ近くの堤防が破れるかわからないからです。だから、台風が来ると消防団が川の見廻りをしました。洪水は本当に恐ろしいものでした。

ところが、タイでは様子がまったく違います。1966年、初めてメナムデルタを訪れた私は本当にびっくりしました。6月といえば、若稲の時期のはずなのですが、稲は見えません。地平線にまで広がる全面が草で覆われていて、そこに何百頭もの水牛が草を食べていました。なんだ、全面牧場じゃないか、私はそう思いました。しかし、やがて私は土地の人達から教わりました。そのうち洪水がやって来る。すると雑草はみな溺れ死に、稲だけが茎を伸ばして、水面に顔を出し、花を咲かせる。ここは浮稲地帯だったので。

100km四方がまっ平らで広がっているデルタでは日本風の稲作はできないのです。5月になると人びとはまだ水のないデルタを水牛ですき起し、初をバラ蒔くのです。やがて、稲は雑草と一緒に芽を吹き出します。だが、この時には雑草が多くて、とつてい水田には見えません。そこに水牛が

入って草を食つのです。こつこつ稲作のなかでは井堰作りのための共同労働などありません。井堰など作りたくてもできないのです。洪水はあまりにも広範囲にやってくるので、人びとはただそれに身を委ねて、生きる以外に手がありません。

メナムデルタの洪水は雄大です。だが、危険ではありません。堤防を破り、家を流すようなことはありません。ゆつくりとやってきて、デルタ全体を覆い、稲を生育させ、膨大な量の魚を呼んでくれるのです。だから、洪水は破壊をもたらす恐ろしいものというのではなく、むしろ恵みをもたらしてくれる、ありがたいものなのです。

所変われば品変わる。世界を広く見渡してみるといろいろの種類の「洪水」があり、雨期の風景があります。そして、それを巧みに利用した人びとの生活があります。政治・経済だけで引かれた国境を一度取り払ってみて、雨期の風景を主題にした世界地図を作ってみたらいかがでしょう。雨期の世界単位図です。雨期の様子で世界を何十かのブロックに分けてみる。あるいは、これは21世紀中に現れるだろう超国家の時代の世界地図に近いものになるのかもしれない。



人口750万、  
実際には1000万人が住む  
と言われるタイ・バンコク。

この大都市の年中行事となっているのが  
雨期の「洪水」です。

毎年のように水に浸かる。

にもかかわらず、

水に浸かっても悠々と構えていられるのは

なぜなのでしょう。

タイの人々がどのように水と接しているかを知ると、

リスク感覚の違いを強く意識させられます。

ねじ伏せられる洪水と、満ち溢れる満水。

その違いは、水害対策という

私たちの考え方をさえ変えてしまいうつです。

## 満水のタイ

これは、日本の水防意識の持ちようを見直す  
ひとつのきっかけなのです。

水の文化 13号 2003年2月

特集「満水のタイランド」

雨期の世界単位 高谷好一 2

チャオプラヤー川流域の近代物流史

水辺空間の価値を変えた交通モード 柿崎一郎 5

水資源 開発と保全のあいだ 中島正博 10

地域プランナーが語る水の国タイ

開発におけるテクノロジーと習慣の共存 スワットナー・タダニティ 14

アジアの水辺から見えてくる水の文化

タイ中部の水辺の住いと暮らし アジアまち居住研究会 17

タイ中部の水辺から見るタイ社会の移り変わり 森田敦郎 29

満水のタイ 写真紀行 編集部 30

水の文化 染習実践取材 三重県長島町と岐阜県大垣市

輪中の智慧を伝えるリスクコミュニケーション 36

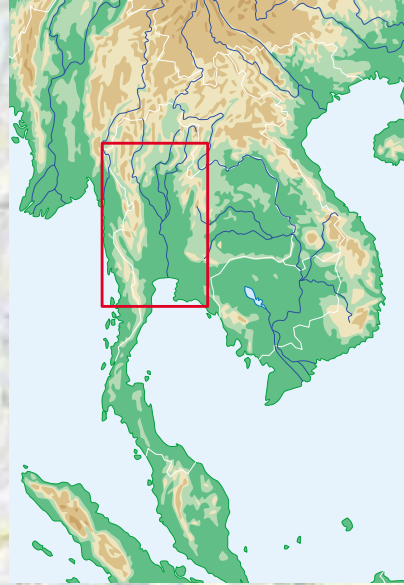
水を治める力 編集部 42

くらしのまなび 微笑みの国タイ 所澤さやか 46

水の文化書誌 アジアの水 古賀邦雄 48

データで読む水の文化

インフォメーション 51



### チャオプラヤー川流域

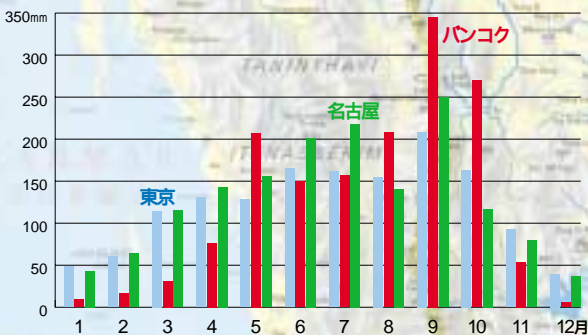
チェンマイ北部から流れるピン川はブーミポンダム下流でワシ川と合流する。次にスコータイを流れるヨム川とピッサヌロークを流れるナン川と、ナコーンサワンで合流しチャオプラヤーと名前を変える。中部デルタの頂点と呼ばれるナコーンサワンには自然湖ブンポーラベットがあり、水量調節タンクの役割を担っているが、タイ四大河川の水量はともも賤い。チャオプラヤー川はターチン川と分岐した後、アユタヤーでパーサク川と合流し、バンコクを抜け海へ注ぐ。13世紀、王宮を中心とした都がスコータイに建設され、タイ族国家が成立したころ、チェンマイにもランナータイ王国、隣りにはバヤオ王国があった。15世紀にはアユタヤー王国がスコータイ王国を併合。アユタヤーは14世紀半ばより約400年に渡って栄えたが、18世紀ビルマに滅ぼされる。1767年、新王がトンブリーに都を建設したが15年で幕を閉じ、チャオプラヤーの対岸バンコクに都が建設されラタナコーンシン王朝が始まる。現在に至るタイ王朝の歴史はチャオプラヤー川に沿って流れてきたともいえる。

### デルタ

デルタとは河口にできた三角州のこと。インドシナ半島には、イラワジデルタ（ミャンマー）、メコンデルタ（ベトナム）、チャオプラヤーデルタ（タイ）という、三つの大きなデルタがある。イラワジ川は雨期と乾期の水位差が10mにも及び、洪水の流量はチャオプラヤー川の10倍を超える。このため、デルタ開発は洪水に備え、農地を堤防で囲う輪中建設から始められた。メコンデルタは、洪水の流量はイラワジ川と同じ程度だが、途中にトンレ・サップ湖という巨大な遊水池を持っていたため、運河網建設を中心に開発が行われた。チャオプラヤー川の開発は19世紀中頃から、縦横に運河を掘ることで行われた。

### 雨期と乾期

「雨が多いのは、バンコクと名古屋のどちらか？」と聞かれたら、たいていの人は「バンコク」と答えるだろう。ところが、ここ30年間の年間降水量の平均を比べると、実際はバンコク（1530mm）よりも名古屋（1564mm）のほうが多い。東京（1467mm）と比べても、バンコクは70mm程度多いだけだ。しかし、バンコクの場合は降り方が偏っている。モンスーン地帯特有の気候のため、乾期には水が足りなくなり、雨期には東京の倍近くの降雨がある。だから雨期には浸水が発生する。バンコクを水の都というイメージでとらえるのは、こうした雨期の印象が強いせいだろう。





# 水辺空間の価値を変えた交通モード

## 公文書史料と格闘 埋もれた宝を探す

柿崎さんが、タイとかかわり始めたきっかけを教えてください。

父親がタイに赴任したことで、中学校時代に3年間をタイで過ごしました。のちに進路を決めるときにタイにかかわる研究がしたいと思ったのですが、元来の鉄道好きからタイの交通を専門にしようと思いい立ちました。ただ、誰も手をつけていませんし、一から始めなくてはなりません。さらに、鉄道の造られる前の状況と鉄道敷設後と比較しようとしても、先行研究が存在しなかったため、敷設前の状況がさっぱりわからなかったのです。

地方に行くにはどのような手段があり、どれくらいの時間がかかったのか。こんなことさえも、きちんとした研究がなされていないのだから。ですから、鉄道を調べ、ためには鉄道以外のことを知る必要が生じ、期せずして、物流全般を調べることになりました。

どのような方法で調べていたのですか。

まず、資料は主にタイの公文書です。100年前の史料を1枚ずつめくって、「何か出てこないか」と探します。

タイでは古い資料を探すことが難しい。今でもそうで、役所に行き「このデータ過去10年分欲しい」と言いますと、2年くらいしか残っていないことはざらです。古いデータを史料として残すという習慣がな

ったのです。また、ビルマなどの国では、当時の宗主国に史料が残されていることもあり、タイは植民地にならなかったものでそういったこともないのです。

ラーマ5世(在位1868~1910年)になってから、公文書を意識して残そうとするようになりまし。きちんとそろっているのは1880年代以降です。それも、すべてが残っているのではなく、残す史料を取捨選択し、後生の人が勉強できるように「サンプル」として残している例が多い気がします。

でも、探せばけっこう出てくるんですよ。公文書というのは一応タイトルがついているわけですが、中身とタイトルが一致しない。結果として中身を全部見なければならなくなります。おもしろい内容が見つかるときには、タイトルを見ただけでは予測がつかない場合のほうが多いの

です。宝探しと同じですね。タイの公文書館には、正味3年か4年の時間をかけて通っています。日本人でタイの公文書館を常連にしている人というのはそうはいないでしょう。

もうひとつ役に立ったのは、欧米人の旅行記です。「バンコクからチェンマイまで何日かかる」とか、「ここまで船に乗って、そこから象に乗った」ということを、事細かに記しているものもある。それらを全部集めました。

水運の時代は雨期と乾期で  
遡航先が異なった

タイの鉄道は、ドイツ人の技師を迎え入れて造られました。彼らが年次報告書を作る伝統を確立したお蔭で、鉄道に関する記録はきちんと残されています。各駅の貨物発送と到着量は、全部わかりました。問題は、



柿崎 一郎  
かきざき いちろう

横浜国立大学国際文化学部講師  
1971年生まれ。東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了。主な著書に『タイ経済と鉄道』(日本経済評論社、2000)、共訳書に『リズベス・スリタイ』(母なるメコン)、その豊かさを蝕む開発(めこん、1999)等がある。

鉄道の輸送状況を比較評価するため  
に、他の交通手段や、鉄道建設前の  
状況を知る必要があったことです。  
19世紀後半、タイでどのような交  
通手段が使われ、何が運ばれたか。  
それと比較することで、鉄道の効果  
が明らかになるわけです。

鉄道が敷かれる前の主な交通  
手段は何だったのですか。

基本的に水運です。南部では沿岸  
航行、バンコクから内陸部に行くこ  
きは、河川水運です。川が使えない  
区間に限り、陸路が使われました。

このころのタイの道は、もちろん  
未舗装ですから非常に状態が悪い。  
雨期には路面がグチャグチャになり  
場合によっては水没してしまつて。こ  
れでは、陸路は完全に水運の補充機  
能しか持てないわけです。

バンコクから、山間部の例えばチ  
エンマイに行くとき、雨期の水位の  
高い時期にはチャオプラヤー川を遡  
って行くことができませんでした。た  
だ、乾期ですと、途中から象を使って陸  
路で行くというのが普通でした。乾  
期でも、支流のピン川の先、ターク  
までは船で行けます。そこから上流  
は、象に乗り換えたわけです。

当時主に運んでいたものは何  
ですか。

バンコクから北部に運ばれていた  
のは、綿服や糸などです。

一方、北部からバンコクに運ばれ  
たのは、チーク材などの高級輸出品  
材や錫です。チークは、ブミボンダ  
ムができる1960年ころまでは川  
に浮かべて、筏で流していました。  
また、米は当時の主要輸出品でし  
たから、やはりバンコクへ大量に集  
められていました。

当時は、圧倒的に内陸からバンコ  
クへの輸送量が多かった。物流の方

向が川の流れと一致していたのは、  
都合のいいことでした。

### 水運の輸送コストと 空間形成力

乾期に陸路を使うとすると、  
そこに宿場のようなものが発生した  
のですか。

どうも、宿場ができるほどの往来  
はなかったようですね。キャンプの  
ような形で泊まっている。ただ、あ  
る資料を見ますと、北方で、毎回同  
じ場所へ泊まっている場所がありま  
す。その地名に、休憩所を意味す  
る「サーラー」という言葉が出てき  
ます。1日の行程ごとに、簡単な休憩所  
のようなものがあつたのでしよう。暑  
い地域ですから、日の出前に歩き始  
め、日中は休んで、夕方また歩く  
というやり方で、1日20kmというのが、  
当時の陸路の目安でした。

また、川沿いには細かに物資集散  
地が散らばっていましたので、そこ  
には簡単な宿泊施設があつたかもし  
れませんね。

乾期のときの積み替え地点は、ナ  
ーン川ではウッタラディットです。  
ここより北は山岳地帯で、象や牛、  
騾馬を使って隊商として歩いてい  
った。積み換えコストもたいへんです。  
はつきりとはわかりませんが、積  
み替え場所では、積み替え商がいた  
のでしよう。あらかじめ手配するこ  
とではできないでしょうから、中継点  
にはそういう役割を果たした人たちが  
いたと思います。

バンコクでは、干潮時と満潮  
時では、河川の水位の差が2m前後  
あるようですが、舟運には影響があ  
りますか。

チャオプラヤー川の河口には砂洲  
があり、海路でバンコクに入る船は  
満潮を待たなければ、その砂洲を越  
えることができませんでした。

地図を見ると、バンコクの手前に  
大きく湾曲している箇所があります。  
開削して川の流れを真っ直ぐにした  
時期もありましたが、満潮時に海水  
がトンブリーの果樹園にまで影響を  
及ぼすので、現在ではあえて湾曲し  
たままに残されています。自然相手  
の事柄は、効率だけでは推し量れな  
い側面も持っているのです。

一般的な船の大きさは、4人乗  
つて、1人が舵を取り、最大で4tの  
荷物を運んだそうです。

1870年代に蒸気船になつてか  
ら、下流の方の漕上は楽になりました。  
その蒸気船も、水の少ない時に  
は、ナーン川までしか漕れま  
せん。乾期になると、そこまで行  
けなくて、アユタヤの先にあるア  
ーントンという町までです。商人  
にとって、乾期は輸送コストがかか  
って仕方がないのです。

### 政治的事情が左右した 鉄道経路

その後、1880年代にバンコク  
から地方に鉄道を敷設する計画が出  
てきます。タイが鉄道を造ろうとし  
たのは、2つのきっかけがありま  
した。



## 水辺空間の価値を変えた交通モード

ひとつは、イギリスとフランスが鉄道を造らせてくれと申し出てきたこと。当時イギリスはビルマから、フランスはインドシナから中国へ入るルートを持ちたいという念願があり、タイを経由地として利用したい思惑があったのです。しかし、「鉄道を西国に造らせたなら、沿線の領土が奪われてしまう」と警戒したタイ政府は、イギリスに「鉄道は造らせないが、代わりに、自分たちでバンコクからチェンマイまで鉄道を敷設する。それが完成したら、ビルマ側ともつなげましょう」と約束したわけ

です。もうひとつのきっかけは、漢族ホーの反乱です。ラオスの北部(当時

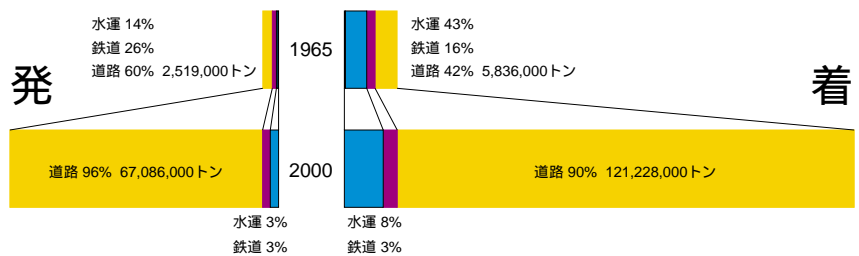
はタイ領)で漢族ホー(太平洋国の乱の残党と言われている)の反乱があり、その討伐が85年から86年にかけて行われました。バンコクからウッタラディットまで大量の兵士と食糧を船で輸送し、そこからは家や家畜を使って陸路でメコン川に出る。それから、ルアンプラバーンというラオスの王都まで水路で行きます。大量の輸送ですし、各地方の領主に経費を負担させ、輸送手段である象や家畜を供出させようとしたため、バンコクから送った米が現地にはほとんど届かないという有様に終わりました。こういう一件があり、ラーマ5世とタイ政府は、象や家畜に頼る陸上輸送には限界があると思

い知らされたわけです。敷設経路については、水運が使える場所に並行して鉄道を造っても輸送費用の面ではあまり意味がありません。チェンマイへの鉄道では、途中のナコーンサワンより南では舟運のほうが有利なので、水運の使いな

い場所を優先させようという意見があり、バンコク〜コーラート間がまず計画されました。第一に着手されたコーラート線は、1900年に完



右頁：タイの鉄道建設前の交通状況図。 左上：1906年タイ鉄道局の鉄道建設計画路線図。ともに柿崎一郎『タイ経済と鉄道』日本経済評論社、2000年より  
右上：20世紀初頭の象の陸送隊列。Karl Döhring, *The Country and People of Siam, Land und Volk*, 1923より  
右下：川幅いっぱいには並ぶチーク材の筏。Arnold Wright, *Twentieth Century Impressions of Siam* LLOYD'S GREATER BRITAIN PUBLISHING COMPANY, LTD. 1903より  
下：バンコク発着の国内貨物の水運、鉄道、道路における輸送量比較。道路輸送の量、割合が大きく伸びているが、水運、鉄道の輸送量そのものが減ったわけではない。



成しました。次に計画されたのが、チェンマイへ至る北線です。イギリスによるモールメイン〜雲南間の鉄道計画を認める代わりに、タイが建設を約束した路線の一部でもあったことから、コーラート線に次いで建設されるべきでしたが、コーラート線の建設請負業者との間で、訴訟問題が発生したために北線の着工は大幅に遅れました。1909年にウッタラディットまで、1921年にチェンマイまで開通しました。タイの鉄道史の特殊性は、輸送手段としての必要性に迫られて、というだけでなく、イギリス、フランスからの外圧に対抗するためということが、他国と大きく違っている点です。鉄道と水運が競合する時代はあったのでしょうか。

バンコクと地方を結ぶ鉄道網を構築しようとする、必然的に鉄道と水運が並行した区間が生じます。ここで、鉄道と水運が競合することになります。コスト的に見ると、鉄道が水運より安くなるということはありません。鉄道も雨期は安く、乾期は高い価格設定を行い、水運と競合していました。実際の運賃以外で問題となったのは、輸送時間の迅速性です。輸送時間では鉄道のほうが水運より圧倒的に速いことから、迅速さが要求される物資の輸送には、鉄道が有利でした。しかし、当時最も重要な産物であった米は、輸送に時間がかかって、品質に大きな影響が出ないことから、水運のほうが好まれました。しかし、自動車による陸運の登場で、積み替えコストの発生という点では、水運も鉄道も大同小異ということになるわけです。

### 開発の始まりと 全国に伸びる道路網

1932年に立憲革命がおき、王制から民主制に移行します。その後道路を積極的に整備することになり、バンコクから地方への道路が徐々に造られていきます。それまで鉄道と水運に二分されていたバンコクの輸送手段に、新たに道路という選択肢が加わったのです。ただ、これが全国に広がり、自動車輸送が主流になってくるのは60年代ごろまでかかりました。



上：バンコク市内を流れるチャオプラヤー川には、長く連なって行き交うハシケを縫って、高速水上バスが白波をたてる。さすがに幹線水路にはまだ渋滞がないが、舟数が多いだけに排ガス規制も問題になっている。

右：チャオプラヤー川上流には、河口までの距離を示す、日本の高速道路を彷彿とさせるサインが数多く見られる。

左：細い水路に入るエンジンボートには舵がなく、とてつもなく長いシャフトの先についたスクルーに頼っている。取り回しには不便に見えるが、舟が浮き草に絡まった場合の安全策だ。その嫌われものの浮き草ウォーターヒヤシンスが、近年脚光を浴びている。籐と同じく家具に利用され始め、洗練されたデザインと、素材の新しさが市場に受けている。



時間がかつていたのが、車で4時間で行かれるようになりました。道路ぞいには畑がほとんど広がり、牛乳製造等の工場ができ、いわゆる「開発」された空間が、見られるようになりました。人々は「開発」がどのようなものか、目の当たりにしたわけです。本当は誤解のような気がするのですが、そのような結果を目指して、道路を全国に伸ばそうとしたのが60年代なのです。

タイの開発体制は、1958年、63年のサリット政権に端を発しています。開発独裁の最初にあたるのですが、良くも悪くも経済開発を強力に押し進めました。この一環で、各地で高規格道路が延び、70年代初頭までにはほぼ完成します。

バンコク・チェンマイ間やバンコク・マレーシア国境間など各地に、高規格舗装道路が伸びました。道路区分としては日本の国道と同じですが、速度制限がありませんから、利用者は高速とばしています。道路が整備されると、車の台数もどんどん増えてきます。当初は、トラックが多く、自家用車はずっと後になってからのことです。自家用車は富裕層の持ち物で、そういう層の人は現在内陸に家を持っています。一方、川沿いには商家の立地が多いのですが、ビジネスに成功した中国人も、新居は道路沿いの住宅地に引越すことが多くなりました。

自動車の普及にしたがい、水運は少なくなってきたのでしょうか。データが少なくはつきりしないの

ですが、バンコク発着貨物輸送量の比較を見ると、全体の輸送量が1965年から2000年の間で飛躍的に増えていきますので、構成比が変わっても、水運貨物量が減ったということにはなりません。シェアとしては道路輸送が圧倒的に高くなっていますが、量として水運が減っているという事にはなっていません。

水運で運ばれるものは、変わってきましたか。

現在水運で多いのは、砂の輸送です。それに伴い、川沿いにセメント工場が立地しています。あとは農産物と建築土木資材ですね。これは都市生活者が増えたことで、建設ラッシュが起きたことを表しています。水運では、基本的には重くて安いものを運ぶわけです。地方でもビルやニュータウンが造られ、建築資材やセメント、砂の需要が増えています。それに伴い、水運の役割もそれなりに増えるのです。

農業生産の効率はどうでしょうか。上がってきたのですか。

いや、効率はあまり上がっていないというのが現状です。デルタの中では灌漑が発達していききましたので、二期作、三期作ができるように進化している所もあります。しかし、機械化が進んだことによって生産高が上がったかという点、どうもそうではないようです。

すると、商品経済化が、農業

生産の効率を上げることに結びついていない場合があるのですか。

かつては、農民も増産に励みました。道路などのインフラが整備され、作れば売れると、未開の地を田圃や畑にしてきたのですが、もう未開地もほとんどなくなりました。そうなるので、次には生産性の向上に走るはずなのですが、それはあまり行われていない。行われていない最大の理由は、生産性向上には資金が必要だからです。そんな金をかけられないから、今までの方法で行う。今までどおりしていると、だんだんと食えなくなる。そこで、農民が、どこかに働きに行かざるをえなくなるのです。

中部地域以外では、現金収入の基盤は、もう農業ではなくなっています。収入の多くを都会で働く子どもたちが担い、仕送りがメインの収入となっている農家がかなりあります。ただ、農業をやめない理由は、主食のコメは自分で作るという姿勢を崩さない国民性にあります。たくさんできたら売るといって、細々と続いている農家が多いようです。

日本の場合、農業の効率化に農協などの果たした役割が大きかったわけですが、タイではそのような中間組織は機能しなかったのですか。

一応、そういうものを奨励する政策は採られたのですが、組織化にはあまり成功しなかったですね。場所によってうまくいった所もありますが、全体としては少数派です。



規制を中心とした産業政策は行われてこなかったということですね。

そうですね。特に、農村が現金収入を得る機会を作ったり、農村で人々が食べていけるようにすることはあまり熱心にやってこなかった。もちろん、地方に工業団地を造るということとはしていますが、それは限られた地域だけです。全国規模でできませんから。

実は、今、タイでは、一村一品運動が行われています。これはタクシン首相が、日本の大分県の運動を見習って提唱していることです。地方の人が自分たちでアイデアを出して、自分たちの村の特産品を作り、それを売り出そうとしたり、その一環として、日本で言う地酒（どぶろく）の解禁とか、地方の農民が組合を作って、小規模の醸造をできるように機会を与えたりしています。これから、各地方の人が特色を持った村づくりを進めていくことになると思います。

現在のタイは、米に代表される一次産品の輸出を、大して奨励はしていませんが、一応残しているという点では、隣のマレーシアのように一次産品がまったく衰退してしまっただ国と異なります。このため、1997年のパーツ危機のときには、農村に避難した人もかなりいるといわれています。農村が、いざという場合の余剰労働力の吸収源となり、セーフティネットと言っているのかわかりませんが、一定の役割は果たしているようです。

### 変わる暮らしと社会

道路網の完備により、モノとヒトの行き来が、迅速かつ簡単になりました。バンコク郊外に工場が林立し始め、都市としての人口の受容力が増えてきます。出稼ぎの人が入ってきたり、出ていったりすることも頻繁です。彼らを運ぶのは鉄道や長距離バスです。

一方で、道路が整備されていくことで、農村では農産物がどんどん商品化され、取引されていきます。今まで販路がなかったものが売れるようになり、現金が手に入る。他方では、今までは買わなくてもよかったものを買つようになる。金がかかる生活の始まりです。農村の購買力が高まることによって、いろいろな工業製品の需要が全国で増えますので、バンコクから地方への輸送も増えていきます。この商品経済化がどんどん浸透していくことによって、今度は、農村で生活ができない人が出現します。彼らがバンコクなどに集中するために、都市はどんどん肥大化してきたのです。

流通業の変化は、日本より、短期間に、なおかつ急速に進んでいます。日本の大店法のような規制もありませんでしたから。今、タイではそのような規制を考えているようですが、外資による大型ショッピングセンターがどんどん入ってきています。そして、それらが乱立して地方に出店し、既存の市場とか中国人の雑貨屋から客足が遠のいているという事情もあり、日本と同じ状況です。オ

トバイと車の自家用が増え、買い物に陸上化したということですね。交通という面では、タイも日本が高度成長期に経験した道筋と、似たコースをたどっているといっています。



一家に一台、庶民のマイカーはオートバイ。3人乗り、4人乗りは当たり前。日本に比べ、圧倒的に橋の数が少ないタイでは、小さな都市でも橋が渋滞のボトルネックになっている。排ガス問題は深刻で、警官のいでたちもご覧の通り。ヨチヨチ歩きができる子は、ハンドルに掴まる術も修得している。高価なためか、ヘルメットを着用した子どもには、左端の写真でしかお目にかかっていない。



# 水資源 開発と保全のあいだ



**中島正博**  
なかしままさひろ  
広島市立大学国際学部教授  
1950年生まれ。東京教育大学農学部卒業。イリノイ大学大学院博士課程修了。(財)国際開発センターに入り、主に水資源開発支援業務に従事。1994年より現職。



## 水資源開発支援 コーディネーションが大事

これまでの仕事の内容についてうかがえますか。

私は、大学では農業水利(灌漑、排水等)を勉強し、アメリカで水資源計画を専攻しました。その後日本に戻り、(財)国際開発センターに入り、開発計画づくりや、政府開発援助(ODA: Official Development Assistance)の案件調査の仕事をしてきました。タイの調査も、1990年から2年間行っています。水資源開発、水管理の仕事を、地域開発の側面から受け持りました。つまり、開発という人間の水利利用を、水資源という面で環境保全も考えながら行う調査をしていました。水を包括的に見るという視点には

地域ごとに事情が違ってきますから、現場に即した提言を行うのは大変です。

ODAの仕事では、このような総合的な水資源開発を提案するためにまず現状を認識し、地域の要請を把握して、その要請にどう応えられるか、というように段階を踏んで仕事を進めます。

現状把握の段階ではどのような要素を見るのですか。

水道、生活用水、農業用水、工業用水、という利水の面と、洪水防止のような治水の面があります。これらが、現状を見る際の不可欠な要素です。

水需要は地域により異なります。都市と農村でも違いますし、国によっても全然異なります。ケニアのような国の都市でしたら、一人一日

何リットル使う」という原単位と、

人口を掛け合わせて需要が推計されます。農村なら、井戸から地下水を使用するし、都市ならば川から水を引いてくる。都市の需要と原単位がわかり、川にはどれだけ利用可能な量があるか、季節的な変化も考慮して、都市用水の需要供給の見通しをつけていきます。

農業用水ですと、地域により開発の目的そのものが違います。たとえば、ケニアでは雨水に頼っている農業地域に、灌漑によりどの程度の人工的な水供給が可能かということ計算します。一方、タイでしたら、チャオプラヤーデルタですと乾期に水が足りなくなりますが、供給が増える可能性はあまりありません。そこで、現在ある水を、いかにうまく融通し合つかということが主な目的になります。この、水の融通、コーディネーションは重要な問題で、水利組合などの分配調整の組織単位が必要となりますが、私たちはこのような社会的な融通が大事だと思っています。水の量は決まっていますし、需要はだいたい増える傾向にある。そして資源が存在する場所と利用する場所は、ともに偏在しています。そこでどううまく使うか、融通しあって使うかという点が重要になります。

## 水への多様な地域ニーズ

最も水を使うのは、米の生産です。タイでは米作が主流で、農民は昔から米を作っており、目をこらしていても作れる」と言います。しかし政府としては、いろいろな作物を作っ



上: 共同作業は、デルタでは珍しい。数少ない、集団での農作業。  
左端より: チャオプラヤー川中流のチャイナートの堰、ロップリーの東方に造られたパーサクダム、事務所に掲示された河川と幹線水路の系統図。  
下: 水利組合の組織図。誰でもわかるように、顔写真まで貼ってある。(パーサクダムを除き写真は、中島さんの撮影によるもの)



てほしいと要求するわけです。乾期は水が少ないので、多様化することでリスクを分散できます。米価に左右されることも少なくなります。農産物の多様化は、農家の所得を安定化させる効果と、水需要を減らしていく効果があります。

ただ、都市、工業、農業のように異なる部門の間では水の奪い合いになることは避けられず、だんだん深刻化する傾向にあります。

地域ニーズを把握する段になると計画する側としては、農業、都市人口、工業生産等の目標を考えます。政府の方針も考えながら、地域の発展の方向性を把握します。

タイでは、都市人口はバンコクに集中していて、2位以下の都市と桁違いです。私はバンコク以外の都市を担当したので、タイの調査のときには都市用水の需要はあまり考えなくて済みました。求められたのは主に農業用水でした。バンコク以外の都市の生活用水は、人口が少ないためにだいたい足りていましたから。

いくつかの県について、各産業の水需要の予測を考えましたが、我々がその決定過程に関与できるものもありませんし、それを政策的にどう分配するかという点にはかわりませんでした。現実には、それぞれの利害関係者が奪い合いながら分配が決められていくわけで、全体の方針に沿って配分するという明快なものでもありませんでした。この点は、日本でも、私が携わった他の開発途上国でも同じで、神様のような独裁的存在が水を配分するということがないですね。



### 慣行水利権がない

タイではチャイナート、アーントン、シンブリー、ロップリー、サラブリー、アユタヤーの各県を担当しました。サラブリーとロップリーは高台です。バンコクからアユタヤーにかけては郊外化が進み、工業地帯が点在している地域です。

われわれが提案した処方箋の一つは、ロップリー東方に90年に計画し、96年に完成したパーサクダムです。パーサク川にかけたダムで、もともと国王の希望があつて、それを支持する形でした。

そのときの国王の考えは、治水というよりも利水に重点が置かれていました。米の増産というほど明確なものではなかったのですが、水不足なので水源を確保するというものでした。ダムの下流のサラブリー地域は工業用水の需要も増えますし、農業も貴重でした。灌漑は整っていたのですが、やはり乾期には足りなくなっていました。

開発時の水利権については、どのように対応するのですか。

私の担当した地域には、日本で言うような水利権は存在していません。水利権とかが「これだけの水量を使う」と保証されたものです。ところが、タイのデルタ地域にはそういうものはない。

伝統的に何百年も前から水利が発達していた北部地域の村では、しつ

かりした慣習ができてくるようです。北部は、伝統的に少しずつ農民が開拓した土地で、そういう所では農民達がルールを慣習的に作っていく。しかし、デルタは開発が新しく、かつ、政府がトップダウン式で行ったものですから、地域の水を使う慣習というものが形成されていかなかったと思うのです。

水利権の伝統が生成されるには、時間が必要であるということです。また、デルタでは「お上」が水利施設を整備するものだから、農民にとっては自分たちで管理するものではなく、要求する対象でしかない。これからは変わっていくとは思いますが、私が調査したころは上から配分されるという感覚でした。

雨期はいいのですが、乾期になるとどうしても水不足になります。そのときには王立灌漑局が水配分の役割を担います。今年はこの地域、来年はこの地域、という具合です。これは権利があるからではなく、各地域が平等になるように、政府が配分するのです。基準があつて、干ばつで水がない、あるいは洪水で米が作れないなどの被害にあつた所を優先することもあります。このようなローテーションは、まさに水利権がないからできるわけで、水利権が存在したら、政府と云えどともこのようなことはできません。

私はかつてパキスタンの調査も行いましたが、パキスタンの場合は水利権がはっきりしていました。パキスタンでは、100年ほど前にイギリスがインダス川の水利を開発していました。そこでは農民の土地の面

積に応じて、時間単位で取水する権利が認められていました。同じデルタでも違うのですが、パキスタンはタイのデルタに比べ、乾燥して水が少ないのです。タイは雨期になれば目をこらしていても、ダムがなくとも、水利施設がなくても、水が上昇してきて農業ができた。タイの場合水の希少性が非常に低かったということも大きいのではないのでしょうか。

## 水利施設が 水需要を掘り起こす

ダムができると、乾期にも米ができるようになる。したがって、「もっと収入が欲しい」ということで、「もっと水をよこしてくれ」と、水需要が現れます。水利施設ができて需要が現れる。需要があるから水利があるわけではないわけです。その水利も、もとは地域のニーズというよりも、国連食糧農業機関（FAO: Food and Agriculture Organization of the United Nations）や世界銀行が戦後、食糧不足解決のために、このデルタの可能性を目をつけて水利を充実させたといつところにあります。稲もいまだに、いろいろな品種が育てられています。雨期になって水かさがあるときにも育つ「浮き稲」だけではなく、条件のよい所では緑の革命を担った高収量品種も作っていると思います。

現在では、農民は雨期も乾期も米作りが主流です。やはり価格が高いですからね。したがって、乾期に水が足りなければ自分で井戸を掘って、トラクターのエンジンでポンプアッ

プして、自分の田畑に水を流しているという所も多いです。

タイでは、治水と利水のバランスはどのように考えられているのですか。

まあ、雨期で家が水に浸かっててもこんなものだという、ライフスタイルです。

ルです。水はコントロールできるものでもないと思っているし、慣れていません。水に浸かれば舟に乗って移動すればよい。農村でも都市でも水の上で暮らしてきたという歴史がある。今でこそ道路という陸の文明が主体ですけど、昔は水路が主体で、その水路を道にできたわけですから。



盛り土され、自ら守られた畑。  
(上下3枚の写真は、中島さんが撮影されたもの)



## 治水をめぐる関係

堤防を造り、土地ができるだけ水に浸からないようなことは公共事業でも行いました。たとえばチャオプラヤー川では、雨期に岸が浸食される。

国としても堤防を造り、侵食されない所を増やすようにしてきましたが、水を排除すれば、どこか違う所に行くわけで、治水にも限界があります。面白いのは、水は人間と人間社会と社会をつなげるのです。水は流れていきますから、こちらの岸で水が入らないようにしたら、向こうの岸で入るようになる。上流で水をとれば、下流では水がとれない。日本では、江戸時代のコミュニティの原動力は水利であったと考えられているくらい、水利用というのはコミュニティ形成の原動力になると思います。

ただ、利害が異なる関係も発生しますね。その調整はどうするのでしょうか。

タイでは地域委員会を作り、そこに役人や警察などが加わり、紛争があるときに調整するというケースがあります。日本でも流域の委員会がありますが、それと似ています。ただ、それが一般的な解決方法というわけではありません。上流の稲作地区と下流のサトウキビ地区の間で話し合いの委員会が設けられた例もありますが、合意に持ち込むのは大変です。

合意に至らない場合はどうするのですか。

王立灌漑局とか村長とか郡長とかの、公的な第三者がかかわるしかないでしょう。パキスタンではタイよりも熾烈な水争いがあります。有力者が独り占めする、自分に有利に取水するという、そういう有力者に力のない農民が押さえられている。ですから水争いは深刻です。

## 水を治める仕組み

これからのタイの水資源管理は、どのような方向に向かうのでしょうか。

最近の動向は正確にはわかりませんが、農業、工業、都市間における乾期の水の配分が重要になってくると思います。特に農業の中で、水を有効に利用する水利組合のようなもの、まさに利用者が自ら水を管理する組織に目が向けられるでしょう。幹線水路の供給については国がある程度行いますが、そこから先、利用者の農民の側でどう水を配分するかということ、組合のようなものを作りうまくやっていくことが、おそらくこの地域でも必要になると思います。まさに、水利施設をつまぐ機能させるためのガヴァナンス（うまく治める仕組み）の問題です。そういうことは、伝統的に水利が発達してきた所では、どここの国でも行われてきました。日本にもありますが、番水制というのもその一つです。ところが、政府が開発してきた所で

は住民の利用組織というのはなかなか育っていない。しかし、農民の利用者組織によって水を賢明に利用する仕組みはタイでも必要です。世界の水不足は、現場ではそういう方向で解決しなくてはならないだろうと思っています。

乾燥地のような水が希少な地域でも、分権的なガヴァナンスは成立するのでしょうか。

ちょっと希望的な言い方になりませんが、「それしかない」と思います。それはどこでも同じです。水に限らないことですね。都市の環境管理についても、われわれは「隣は何をする人ぞ」という社会を作ってきたはずですが、やはり市民が自分たちの資源、環境を管理するという自治的な管理が必要でしょう。北部タイなど、昔から灌漑が発達してきた所はそうですし、日本も以前はそうだった。そういう共同体を重視する流れとは別に、世界には個人主義的な流れもあるわけですが、そのあたりの折り合いについては、これからの課題としたいと思います。

### 水資源 開発と保全

開発の恩恵にあずかれない人たちに、どのような力を与えるのかという問題も出てきますね。

水資源へアクセスできる人と、資源から分断されている人がいるわけです。確かに、今までの開発は、格差をつくり出し、格差を拡大させて



上：個人的に護岸工事がなされた風景。自分の土地を僅かながら広くしていくために、川岸が徐々に迫り出しているのだが、「既成事実をつくってしまえば勝ち」というような慣習が強く、取り締まりの手が届いていないようだ。  
左：舟運に利用されている河川には浚渫が必須だ。いたる所で工事が行われている。  
下：行政が手がけた護岸。石垣風な部分の内側は空洞で、所々陥没しているが、誰も気にしない。護岸の最大の目的は侵食を防ぎ川底が浅くならないこと。



いることがはつきりしてきていますし、それらが世界を不安定にするということもわれわれは学んできません。これからは、富める者も今までの方法を自ら変えなくてはいけないと認識しています。どっぴ方向に変えるかという回答が、自治的に、分権的に、地域社会が利用管理するという方向に見出せると思います。

タイは、そのような共同体による分権的な管理に向かっているのでしょうか。

日本、いや、世界中事情は同じで、タイも近代化を進め共同体がなくなる個人主義的な社会に向かっています。これは世界の趨勢です。一方、アユタヤーで水利組合が機能している例など、両方の流れが併存しています。ただ、タイのデルタ地帯は水利組合が発達しにくいという歴史を持っていきますし、あの辺の人はあまり規制されたくないという自由の気風を強く持っているようにも思います。水利組合などが発達するには不利な条件です。したがって、共同体による分権的な水資源管理ができるのかどうかは、現状では何とも言えないところがあります。

すると、資源の保全と活用のバランスをどこでとるかという問題が出てきますね。資源は使わないと守れないわけですが、それを政策的にどうバランスを取っていくかは、地域によって異なると思いますが。

開発と保全が矛盾するという考え方を、まず改めなくてはならないでしょう。同時に、「開発」の意味も「環境保全」の意味も変えていかなくてはならない。開発は、生活の質(QOL: Quality of Life)を重視するということ方考えます。環境については、「使つことが保全だ」と考え直す。資源は、使わなければ価値がなくなつて打ち捨てられていきます。つまり、人間社会と自然の分断が環境保護である」という考え方を変えなくてはならない。生活のために人間が使うこと、これを前提にきちんと持続的に使っていく。持続的に使つためには保全が必要です。使いながら、保全していく。使えば保全されると単純に考えるのではなく、保全するための賢明な使い方を考える。そうすれば、保全と開発の利害が一致し、つまりは、人間の営みとも調和が取れると、私は考えて

もともとコモンズ(共有資源)は利用者同士の顔が見えるからうまくいっていたわけです。規制するといふよりも、自分たちで納得して決めていくことが大事だと思います。

ただ、私としては、個人主義と協働がうまく統合されればいいと思います。個人主義の延長に、協働が矛盾無く位置づけられる。つまり、自分のために何かするために、人のため、社会のために何かしなくてはならない。それが真実だと思うのです。実績によって、そういう風になんか考えられるようになる可能性はあると思います。





## スワッタナー・タタニティ

チュラロンコーン大学社会調査研究所副所長・  
建築学部都市地域計画学科助教  
チュラロンコーン大学卒業後、オーストラリア・メルボルン大学大学院修士課程（地理学）修了。工学博士。

# 開発におけるテクノロジと

# 習慣の共存

## 源流から下流まで 川と共生する

タイ国土の開発史の中で、チャオプラヤー川の占める位置についてうかがいたいと思います。日本では水が町にあふれたら、災害ととらえます。すぐに堤防を造り、水を遠ざけようとする。ところが、こちらに来て驚いたのは、雨期で水があふれるのは当たり前と思っているかのよう。みなさんが水とつき合っていますね。

それは大事な点です。タイ人はずっと前から川辺に住んでいますので、水があふれることをおかしいと思っただけなのではないでしょうか。地域計画の立案を専門とする私の目から見ても、タイは水の国と言えます。水の使い方、水と一緒に生活できるような管理方法を、歴史的に引き継いでいると思います。

タイの習慣の起源は、チャオプラヤー川流域の中部タイにあると言っています。北部タイ、たとえばチェンマイの人々は川のそばではなく、山と川の間広がる台地に居住しています。チャオプラヤー川流域の人たちのように水辺には住まず、山のほうに住んでいます。これは、チェンマイ人の頭のいい点として、北部の川は源流に近い流れが速く、川の側に住むことは危険を伴うからです。

チェンマイの市街は700年の間、一度も動いたことがありません。しかし、最近の人々は、その地域特有の昔の知恵が理解できず、土地を広げ、ピン川のそばに住む人も多くなっています。雨期になると川の流れは滝のようで、本当に危ないと思っただけは見えています。というわけで、タイでもチェンマイの人は、実は洪水の被害に遭っています。

700年前の人は、そのような治

水のメカニズムが分かっていたと思います。それは現代の人も少し考えてみれば分かることでしょう。ただ、今は、それ以上に土地を広げたという誘惑が強いのです。その原因の一つは、観光開発です。観光資源として、水辺に価値がもたらされた結果、ピン川のそばに人々が集まり、居住者も増えました。

一方中部デルタより南は、川と海のレベルが同じ程度で、川の流れもたいへんにゆったりとしています。豊かな土地で、開発の手が入る前には、肥料をほどこす必要がまったくなかったといえます。昔のタイ人は源流から下流まで川とつきあひ、自然と共生する術を知っていたと言えるのです。

テクノロジと習慣の  
バランスが取れない

したがって、タイ人は近代の経済





上：20世紀初頭と現在の写真。バンコク市内の同じ所を撮影したもの BANGKOK THEN AND NOW AB PUBLICATIONS 1999より  
右：観光客相手の夜店が賑わうバンコクのナイトバザール。  
左：タイのお菓子には種類が多い。おとうさんが手にしているのはルークチュップと呼ばれる青豆で作った果物型のお菓子。

成長が始まるまで、舟を使い、川や用水と生活を共にしていました。おそらく、雨期の増水も、洪水とは思わなかったでしょう。むしろ、雨期は「うれしい時」だったと思います。洪水があっても豊かな土地、いや、洪水があつてこそその豊かな土地だったのだでしょう。このような事情があるため、住居も高床が多かったのです。

昔のタイ人は、道という人が歩く小さな歩道を意味していました。もちろん、今は車道です。ラーマ5世の時代（在位1868〜1910年）は、タイが急速に近代化を遂げ、社会も大きく変化した時代でした。それでも道があつても川を忘れず、道と川が両方使われていた時代でした。

1932年、ラーマ7世の時代に立憲革命が起こり、政体もそれまでの君主制から民主制に変わりました。民主制になつてもみんな王様を尊敬しているわけですが、その後、特に1960年代から現在のラーマ9世に至るまで、タイは急速に経済成長を続けました。この間に、タイは利益のみを求めてインフラを造る時代に入つたとも言えるでしょう。

タイの文化は元来水をベースにしていますので、川と道を一緒に使つべきなのに、今は道だけ舗装し、川は埋めています。テクノロジーと習慣のバランスが取れていないのです。家の建て方も変わりました。昔は高床でしたが、今は土台に土を盛る方法で家を建てています。川沿いの家は、かつては正面を川に向けていましたが、今では道路に面するように建てられています。

タイの国土整備の方法ですが、地方の整備がどうしても後回しになってしまつたために、バンコクばかりが成長してしまいます。このため、車が増え、道路が必要になつて、運河を埋める。バンコクが成長すると周辺地域の都市化が進み、豊かな土地なのに田圃を宅地化し、家を建築する。それも、当然、高床式ではなく、土を盛つた上に西欧様式の家を建てます。高層ビルもコントロールされずに建つてゆきます。

バンコク市内の建築ブームのピークは、タイの経済が一番良かった10年ほど前です。労働者が足りずに、多くの農民が周辺から集まってきました。外国からの資金も流入、不動産ブームが起こつて、地価が高騰し、あたかも日本のバブルのころのようでした。

以前は、バンコクには地方からの出稼ぎの季節労働者が多く、雨期になると帰っていきました。しかし、周辺の農民は農業ができなくなり、バンコク市内の工場で働き、バンコクに居づくことになったのです。

バンコク市内の都市計画は、基本的に全国レベルのマスタープランに対応すべきです。バンコクだけ成長するわけにはいきません。そこでタイの中で大きな都市、例えばチェンマイとかコーラートとか主な県の経済を早く整備できるように、大学等を作り人材育成を進めました。

しかし、大学を卒業した人は自分の県で就職せずに、バンコクに移動する傾向があります。人が雇用を求めて移動していたら、いくら地方に大学があつても、また人はバンコクに戻ります。ですから、バンコクの人口は、チェンマイよりも35倍増加しています。とにかく今は、こうしたバンコクへの人口集中問題と産業構造の関わりがわかつてきたので、これを地域計画で解決しようとしています。

しかし、その足かせとなつたのが、97年に起きた経済危機です。97年8月にバーツが急落し、国際通貨基金（IMF）に金融支援を要請した年です。これで、予定していた開発ができなくなつてしまいました。

タイの国土開発は、経済社会開発計画と呼ばれ、1961年に開始以来、数次の5カ年計画として実施されてきています。

経済社会開発計画は、本当にタイの社会を変えました。第1次計画の前つまり、1950年代までは、タイ人は自分たちのことを貧乏だとは思つていませんでした。



バンコク市内のチャオプラヤー川。トンブリー側の水路の入り口にある水門は閘門。チャオプラヤー川の堤防は高いが、トンブリー内部は水位を低く押さえなければならない。



川の水が十分に循環しなくなり、よどみ、汚れたのです。

97年の経済危機は、第7次計画が終わった時期でしたが、その後、製造業などの工場や企業はバンコク近郊に集中するようになりました。そこで働く人たちの年収は増えていきましたが、一方、低所得者層がそれ以上に増えていく。このため、現在の計画では、それまでの財政投資の偏重を改め、人的資源への投資、つまり人を育てることに重点を置いています。

また、計画の進め方も大きく変わってきています。かつては政府が全国をコントロールしていましたが、第7次計画になってから、政府ではなく各自治体が統治するようになり、税金も、それら自治体の自主財源として使えるようになりました。バンコク以外の地域を強化するという方針です。しかし、バンコクの成長は依然として続いています。

### 環境と調和した観光開発へ

ところでタイの人は、心の中で水を意識していて、タイ人と水や川は切っても切れない関係にあります。

工場が立地し、チャオプラヤー川もだいぶ汚れていますが、水に思いがあるためか、実は「汚くなってもまだ泳げるな」という感覚を持っていくのです。ですから、遊びでも通勤でも、多くの場面で川を利用していきます。船着き場は開放的で、村のセンターのようです。

きれいな水、水上交通、陸上

交通。地域プランナーとしての整備優先順位をどのようにつけますか？

どれも欲しいのですが、やはり道路を選びますね。ただ、舟が使える場所ならば、同時に川も整備したい。最近では川側の家に塀があります。昔では考えられませんが、運河が使えるならば、それもサポートしたい。このような方向の計画づくりが、私の仕事です。

例を挙げるならばトンブリー地区（バンコクのチャオプラヤー川西岸部）にあるコクレット島です。現在のコクレット島の主たる産業は、果物ファームと観光です。居住者は農園で収入を得ながら普通に生活し、同時に観光資源としての川からも利益を得ています。よい農園を維持するためには、水をきれいに保たなくてはいけない。さらに、果物が排水スダメーラを受けないように、大型車を通るような道路の建設なども控えなくてはなりません。大きな橋をかける予定もありましたが、経済危機でとりやめになり、ほっとしています。

そのような観光資源を重視した開発は、「テクノロジー」と習慣のバランスが重要であるという考え方が一致するものなのか。

そうですね。コクレットが観光化され人が集まると、情報も集まってくる。観光にかかわっていると、自然環境や昔からの暮らしが、いかに価値のあることに気づかされます。そして、それらを大切にすることが、ひいては自分たちの利益につながるがわかってくるのです。このことは、観光資源を重視した開発がもたらした副産物とも言えるのですが、これからのタイの進むべき道の一つでもあります。

最近では観光客が増え、コクレット島には何の関係もないビールバーなどを政府が開いています。このようなケースは感心しません。地域の方は地域の人に任せればよいのです。同じように、水のことでも地域の人が判断して管理すべきでしょう。タイの人たちはチャオプラヤー川を愛しています。タイの人たち自身のために、食糧産業の面で世界に貢献することのために、川を大切に、もっときれいにすべきでしょう。チャオプラヤー川だけではなく、繋がっている運河も大切にしなければなりません。運河を整備し、川を復活させると人々が川に集まります。最初の目的は観光ではなくとも、あとから観光客がついてくる。経済も活性化される。そうすれば、運河のそばに住む人も、充実した生活を得ることになると思います。

現在のタイは経済再建の途中ですから、外貨獲得の必要性はよくわかります。しかし、お金のために地元の習慣をつぶしてしまうのはよくないことです。政府の役割は地域のアイデンティティを探し、プロモートすることです。両方できない場合は、せめてつぶさないようにして残すことも大事だと思つてます。

ところが、第1次計画で「途上国」という概念が出てきて、タイの人々は自分の国を経済成長という物差しから見ると、貧乏な国と想ってしまつた。一方、開発イコール西欧化したので、たくさんのお金が海外から流れてきました。もともとこれらの計画は、世界銀行や西側諸国からの援助資金を効率的に活用するために作られたものですが、第1次（61～66年）、第2次（67～71年）の計画では、高度経済成長を追求し、これら資金が運輸・通信・電力・灌漑整備というインフラ整備に投入されたのです。

この時期の計画では、バンコク都市圏で川の意義はほとんど意識されず、道路ばかりが造られました。また、チャオプラヤー川の南に「コンブリ」という港があったのですが、もともとあったこの港を使わずに、さらに南に離れたラヨンに港湾施設を移し、そこでバンコクを道路でつなぎました。港の規模を大きくし、より大型船が発着できるようにしたわけですが、典型的なスクラップ・アンド・ビルド方式の開発でした。

第1次～3次計画の目的は、GDPで測った経済成長でしたから、一番資金提供を受けたのは交通インフラ整備だったのです。タイの川はまるで網の目のようにつながって活用されていたのに、道路でどんどん埋められ、分断されました。この結果





# タイ中部の水辺の住いと暮らし

アジアの水辺から見えてくる水の文化

まん ずい タイランド  
満水のタイ



## アジアまち居住研究会

高村雅彦 法政大学工学部建築学科専任講師

1964年生まれ。法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修了。博士(工学)。2000年より現職。専門はアジア建築史・都市史。建築史学会賞、前田工学賞を受賞。著書に『中国江南の都市とくらし 水のまちの環境形成』(山川出版社)、『中国の都市空間を読む』(山川出版社)などがある。

畑山明子

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士課程在学中。1979年生まれ。日本女子大学家政学部住居学科卒業。

庄司旅人

法政大学工学部建築学科在学中。1979年生まれ。

調査・図面作成協力/岩城孝信、広瀬尚紀、市川敬祐、井手禅、上田繁、許斐さとえ、船越恵、吉田千春(法政大学)

通訳/森田淳朗(東京大学) エガシット・ノンバックデー(タマサート大学) パッタウエー・パンサコンナワット、スワタナ・ラートマノラット

2002年の夏は世界の各地で洪水の被害が相次いだ。とくに被害が大きかった中国、チェコ、ドイツ、オーストリア、ロシアは、日本のニュースでも取り上げられて記憶に新しい。洪水による被災者は、この20年間で7倍にも膨れ上がり、年平均では1億3千万人を越えている。地球の温暖化や異常気象に加え、人口増加や都市化による自然破壊が主な原因と言われている。

タイもまた、今年の夏は洪水に見舞われた。チャオプラヤー川流域では、上流から下流に向かって徐々に被害が報告されていく。3月に続き、およそ2回目の調査を実施した8月末には、私たちもスコータイで洪水に出会う。新市街地の中央を流れるヨム川が氾濫し、周囲の建物はまさに浸水寸前にあり、家族総出で土嚢を積む作業に追われていた。ところが、新市街地でわずかに存在する高床式住居の家の住人は、その作業

を上のベランダから眺めているにすぎない。床下2mもあるのだから、浸水したところで何ら問題はない。それが高床式住居の最大の特徴であり、水とともに暮らすタイ人ならではの知恵だということに改めて気づかされた。日本にも、蔵の土地を高く造成し、同時に屋根裏を作って洪水から生産物と身を守る「水塚」という住居形式が利根川流域にある。ダム問題が叫ばれる昨今、こうした水と共生する住まいのあり方をもっと評価すべきではないだろうか。そこで、私たちアジアまち居住研究会は、昨年のバンコク・トンブリー地区(『水文化 第10号』)に続いて、タイ中部のスコータイ、ピッサヌローク、ロップブリー、アユタヤの調査を実施した。チャオプラヤー川の中流域にあるこれらの都市は、それぞれに独自の歴史があり、地形も異なる。それゆえ、水と人々の暮らしの関係も多岐に渡るため、そう

簡単には理解できない地域である。だが、一方で中流域は、同時に上流と下流の両方の性格を少なからず帯びているから、今後、チャオプラヤー川の上流と下流へ調査の対象を広げるには、まずこのタイ中部を知る必要がある。そこから、タイの水の文化を読み解くキーワードを多く得ることができるとは、まだ。タイ中部の多様な水辺環境に応じて、都市の各地区がいかなる住宅をどのように集合させて全体を形作り、その中で人々はどのような暮らしをしているのかを明らかにしようとしたのが今回の報告である。地区も住宅も暮らしも、どれもみな水との共存のなかで成り立っているタイ中部において、地区の空間構造から住宅の構成、暮らし方に至るまでを連続的に見ながら相互の関係を読み解いていく。そのためには、総合体として位置づけることができる地区の空間構造の分析を中心に、地形や水利

といった地理学的な視点、暮らしや生活道具といった民俗学的な視点、家族やコミュニティといった社会的な視点、住宅の構成といった建築学的な視点をその場に添って加えていく。研究であるのだから、もっと分析の枠組みを固定しなければならぬのかもしれない。だが、西欧近代の呪縛から離脱し、アジア独自の見方・調べ方を探す作業は今始まったばかりだ。そのうえ、人間が最初に引き付けられるのは、研究ではなく、その都市や地区の魅力それ自体であることを忘れてはならない。まずは、その魅力のよって出るところを掘り起こすのである。

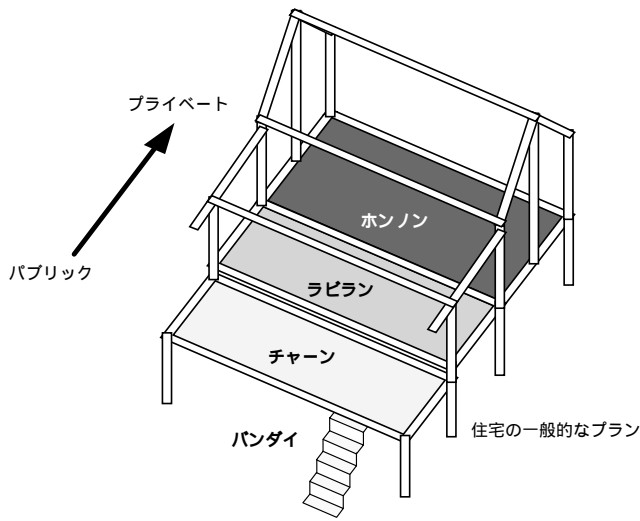
タイ中部では、どの都市でも水辺の住宅の多くが高床式住居であり、川や雨水の利用の方法も共通している。しかしながら、水辺の環境や家族などのさまざまな異なる条件が、個室化を拒み、増改築に対応しうる、やわらかな空間の住宅を生み出した。そして、ピッサヌロークでは川の上に浮き家が連なり、ロップブリーでは斜面と低湿地で住宅の集合の仕方や住まい方が異なり、アユタヤでは同じ条件でもムスリムとそれ以外で水に対して違いを見せる。これらはその都市の顔となり魅力となっており、水辺の環境づくりと住いの関係の特徴づけている。ここで取り上げる事例の様子は、その都市全体を覆うものではない。しかし、まち全体を隅々まで歩き回って探り当てた、その都市の魅力を表す地区ばかりである。

では、さっそくタイ中部の住宅の特徴から見よう。

## タイ中部の住宅 やわらかな空間

タイの伝統的な住宅は、いずれも木造高床式住居である。住宅の地上から床面までの高さは、立地や洪水の浸水の程度によって異なり、低いもので40cm、高いもので2m程度ある。

タイ中部の高床式住居の中でも伝統的なものにバンソンタイ（タイ様式の家）がある。熱による対流を考慮して天井を高くできる切妻屋根と、熱帯のスコールから家屋を守るための約1mの庇が特徴的な住宅だ。屋根は空に伸びて反り、美しい飾り破風が象徴的である。屋根はかつてイネ科のヤーカーで葺かれていたが、最近ではトタンが多く使用されている。



ヤーカーは葺くのが難しく維持も大変であるが、トタンは安く修理もしやすい。その反面、雨が降ると雨音がうるさく、室内には熱がこもりやすい。

住宅は一般的に、バンダイ（階段）チャー（屋根のない移動のための空間）ラビアン（庇下の居間）ホンノン（寝室）の順に奥に行くにつれて私的空間の度合いを増す。ここで気を付けなければならぬのは、これはあくまでも一般的な呼称であって、とくにチャー、ラビアン、ホンノンは機能と空間のあり方が必ずしも固定的なものではないということである。つまり、居間や寝室といった機能面からだけで住民がそう呼ぶために、空間の形態や規模が一定ではないことのほうがむしろ普通で、それらの概念はきわめて曖昧である。本報告では、住民からのヒアリングに基づいて部屋名を記述している。

さて、地面と高床の床は、バンダイ（階段）でつながる。バンダイは大きな住宅の場合、複数設けられることがあり、一つは住宅の表に、もう一つは勝手口のように裏に置かれる。階段下が水際であれば、水上に小さな屋根を架けて床を張り、休息や談笑、時には食事など、実に心地よい空間をつくり出す。

バンダイを登ると、チャーに出る。使われ方や家により微妙に呼び方は変わり、ノークチャー、チャーインラン、パライなどと呼ばれるが、空間としては、屋外広場、あるいは中庭のような屋根のない空間であることは共通している。主に棟と棟との移動に使われ、異なる空間を

接続するための場で、いわば人工地盤といえる。タイは1年を通して水位差が大きく、また洪水も多く、増水すると地面がなくなってしまう。そのような人間と建物の地盤面が不安定な風土のもとでは不可欠な空間であり、地面がないなら自分で作ってしまえ、といったところである。

このチャーと一段段差を高く付けてつながるのが、次のラビアンである。普通、幅2、3mほどのテラスや回廊に似た空間ではあるが、タイの住宅には欠かせない場だ。ラビアンは昼寝、休息、食事、談笑、接客など多目的に利用され、居間に似た空間となっている。就寝以外のすべての日常生活がここで行われる。チャー側は壁がない吹き放しで、風通しがよく、長い庇が日中の強い日差しから守ってくれる。我々日本人のように生活の行為を室内の外どちらかで、あるいはどこで行うか、という固定的な概念を彼らあまり持っていない。その時々に応じて心地よい空間で生活するのだ。彼らの柔軟さがつくり出すタイならではの住空間が、この多目的なラビアンといえるでしょう。

ラビアンの中には、壁で囲まれた寝室のホンノンが置かれる。日中は鍵を閉める家も多く、ホンノンは単に寝るためだけでなく、貴重品を置く場所としての意識も強い。

ホンノンの一角だけを壁で囲い貴重品を収納する部屋とし、壁のない場所に就寝することも多い。住民は壁がなくてもそこをホンノンと呼ぶ。その場合、壁で囲われた部屋を新婚部屋とする住宅がいくつか見られた。タイでは母系が一般的で、特に末娘



右上：バンダイ（階段）  
左上：屋根のないチャー  
上：チャーの隅には水瓶とコンロがあった。  
右：手前がチャー、おばあさんがドアを開けている冷蔵庫は、一段床が高くなったラビアンにある。



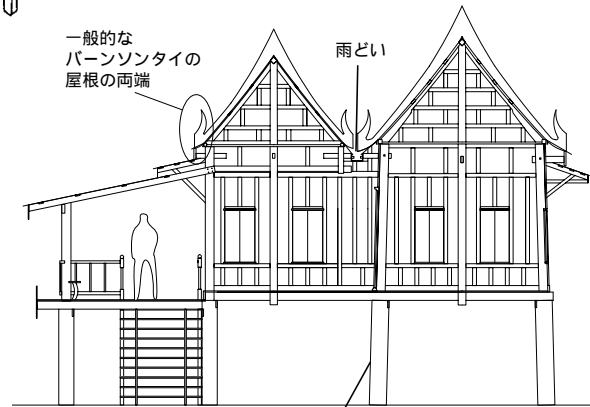
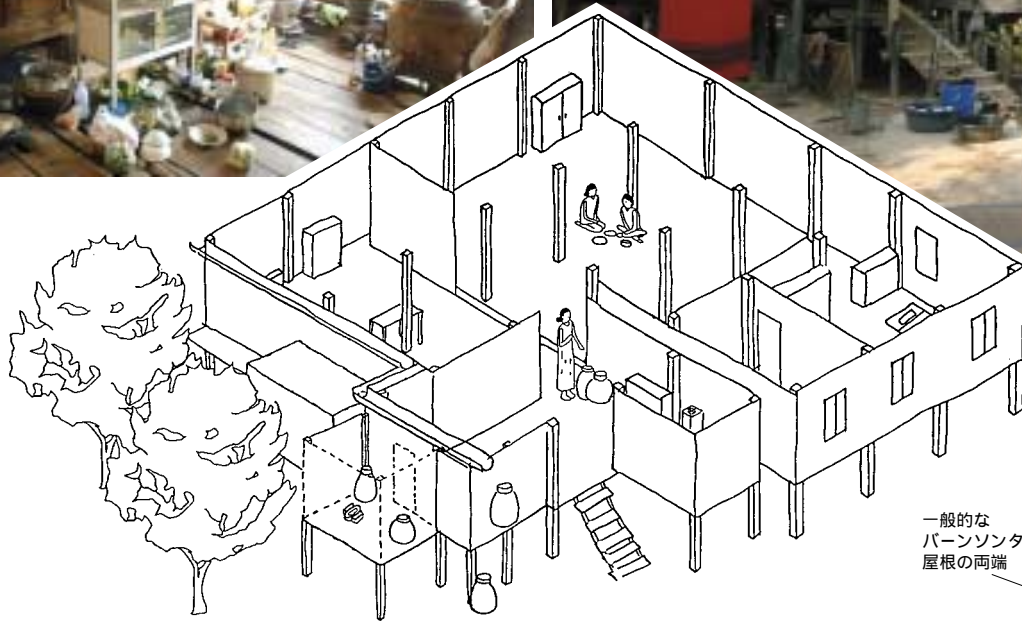
上とは違う住宅。  
壁のない吹き放しのままだが、高床の床下部分を居住空間にしている。



タイ中部の水辺の住いと暮らし



左上：バンダイを上がった  
右手にある台所

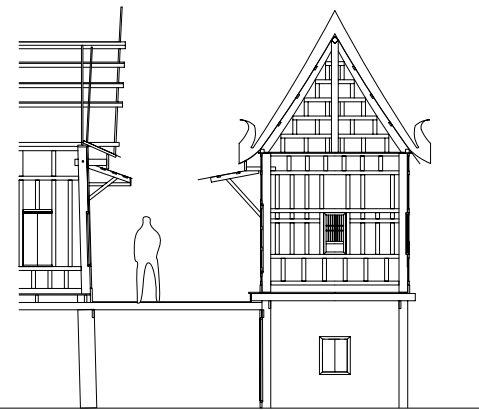


一般的な  
バーンソンタイの  
屋根の両端

雨どい

内側に傾いている

0 1 2m  
0.5

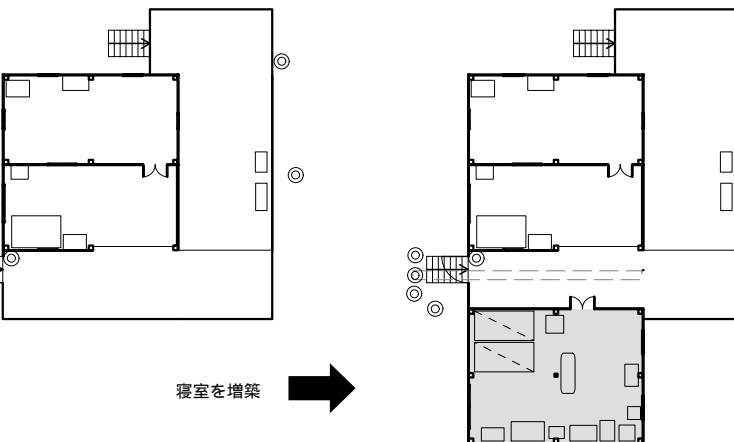


0 1 2 5 10m

元のチャーンを  
室内化し、  
床面積を増やす

が家を継ぐという。山岳タイ族やその系統の少数民族の風習が、こうした都市部でも見られるのは興味深い。時代や立地条件で住宅が変化しても、こうした儀式的空間だけは継承されることを示す一つの例といえるだろう。また、大規模な住宅になると、ホンソンの脇に仏像を納めた専用の仏壇部屋のホンプラを置くことがある。宗教儀式の際に、僧は一段高いラビアンに、住人は低いチャーンに座り、床の段差がいかに意味を持っているかが知られる。

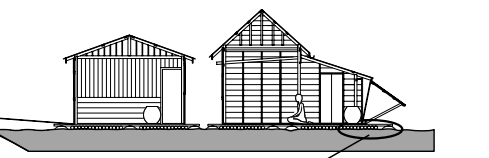
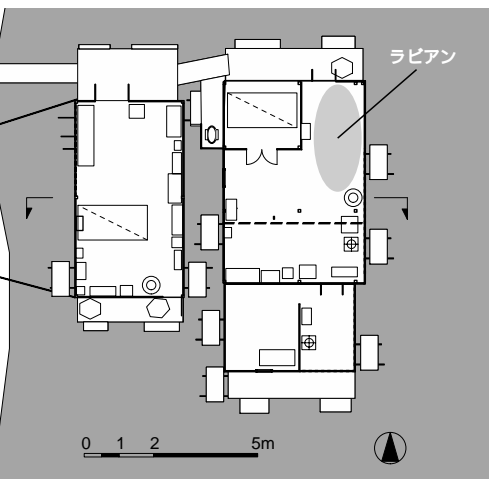
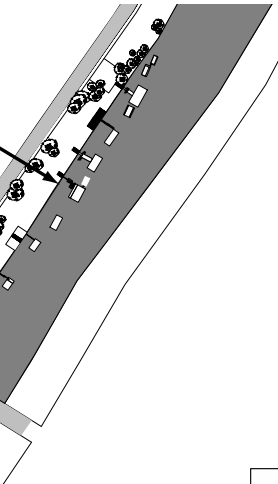
すべてを屋根で覆い、壁だけで空間を分ける住宅に対し、床、壁、屋根などを巧みに使って空間を意味つけていくタイの家は、住宅の中にあるときでも屋外で感じられるような開放感のある空間を多く作り出す。したがって、基本的にはバンダイ、チャーン、ラビアン、ホンソンから構成されるが、それらの組み合わせ方や数などは、実にバリエーションに富む。そうした中で、パブリックからプライベートな空間へと緩やかに変わって行くタイの住宅。人々はその時々で最もふさわしい空間に、自分の居場所を見出ししていくのだ。



寝室を増築



左上：1995年の航空写真



竹とドラム缶

## ピッサヌローク 水に浮く住まい

ピッサヌロークは、「空飛ぶ野菜炒め」が見られる場所として、日本のテレビ番組でよく紹介される。市内の中央を南北にナンン川が流れ、ほかに見どころといえば、仏像が美しい「ワット・プラ・シー・ラタナー・マハタート」があるくらいで、観光客も少ない町だ。しかし、ここでは興味深い住まいが見られる。水上に家を浮かせて住む「ルアン・ペー」、訳して「浮き家」が川に並び、ピッサヌロークならではの風景を作り出している。

現在、ナンン川東岸では開発が進み、リバーサイドウォークが作られて、切り立った堤防が延びている。2002年3月までは、東岸にも浮家が並んでいた。1995年の航空写真を見ると、数も今よりは相当多い。現在では、川の西岸に数十軒の浮き家が軒を連ねている。

浮き家は、竹を組んで、いかだのような土台を造り、その上に家を建てている。ドラム缶を並べて土台にする家もある。家は、川岸に結びつけたロープや竹を使って固定され、水際からは30mほどの細い板を渡して、玄関までの道が造られる。川に浮かぶ家にも電気はしっかり通っているから驚きだ。川沿いの電線から

引つ張っていて、竹竿による自作の電信柱を川岸に差し、家まで伸ばしている。屋根にはアンテナもついている。水位の低い時期には、広くなった川岸が洗濯物を干す場所としても使われ、生活が川岸まであふれ出す。

浮き家は、20世紀初頭までバンコクなどの都市でも一般的なものであったが、川にあるため舟運の妨げになったり、見た目の印象から撤去されるのが多くなり、今では限られた地域でしか見られなくなった。

かつてのピッサヌロークでは、雨期と乾期の水位差が7、8mもあった。そのような変化の大きな水面に浮かぶ浮き家は、水位の上下に応じ

て、家もまた上下する。つまり、水と一体となった住まいなのである。日ごろから陸に住み、「建物は陸に建つ」という私たちの考えを変えてくれるユニークでダイナミック、しかも実に効率のよい住まいといえる。現在ではダムによって水位が調整されているが、それでも、ピッサヌロークで3、4mの水位の変化がある。

浮き家は水に浮かんでいるということもあり、2階建てはもちろん、規模の大きな住宅はなく、間取りもいたってシンプルである。しかし、小さいながらも陸上にあるタイの伝統的な住宅の構成、特に軒下空間のラビアンや寝室の在り方が類似している点は興味深い。規模の小さな浮

タイ中部の水辺の住いと暮らし

き家では、庇下の30cmほどの狭い部分  
がラビアンに相当する。ここに子  
供が座わり、遊んだり、目の前の水  
をタライにとって洗髪したりする風  
景はよく見られる。寝室は陸側に壁  
で囲ってフライバシーを守り、川側  
には水に開く開放的な居間を配置す  
る。高床ではなくても、タイの伝統  
的な住宅と同じ構成でつくられてい  
るのだ。

狭い浮き家で歩き回りながら必死  
に図面を書いていると、住宅の部材  
に頭をぶつけてしまうことがあった。  
これは建物自体のスケールが日本と  
違つから起きることで、タイ人の平  
均身長は日本人より10cmほど低い。  
家は、人体寸法に合わせて作られて  
いる。人間の指や腕の長さを単位  
として、柱や梁などの部材の長さを  
決めているのだ。

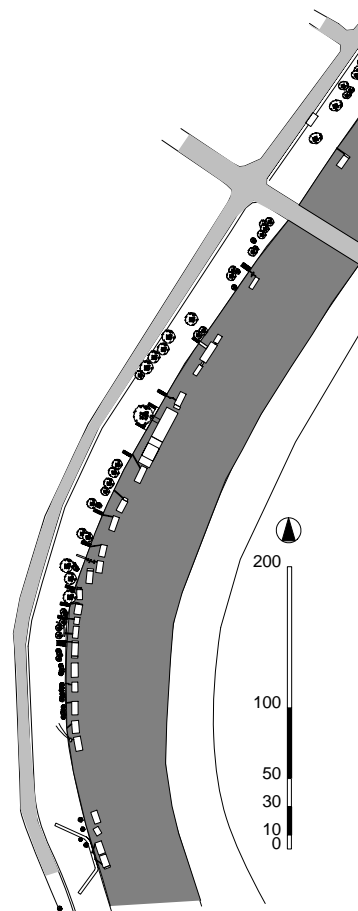
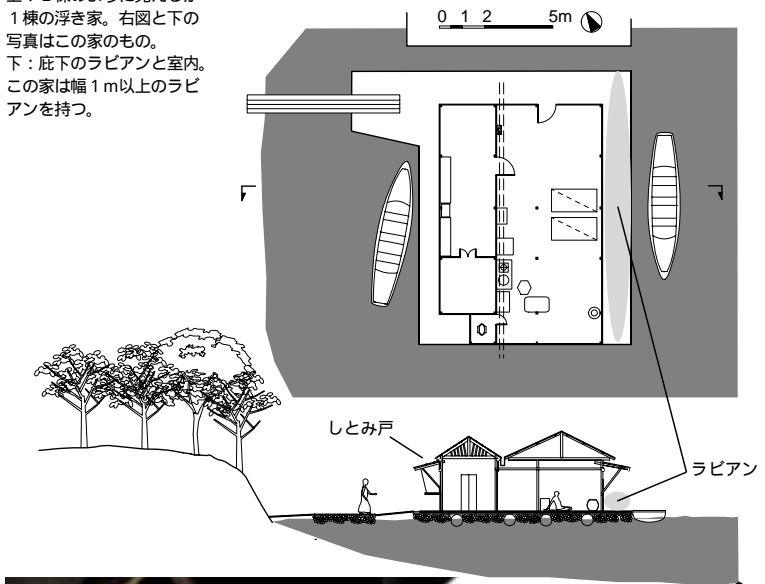
床板の一部分を適当な大きさに切り  
取り、そこから水面に直接用をたし  
て、川の水でお尻を洗つ。住宅の中  
で、トイレが川の下流に位置してい  
ることもつなげる。しかし、下流  
にあったとしてもすぐ隣に別の浮き  
家が建つ。一見、不衛生に思えるが、  
川には多くの小魚が住み、トイレか  
らの餌を待っていて、次の家流れ  
着く前に食べてしまう。川の持つ自  
浄作用を最大限に生かした住まいと  
いえるのだ。

な環境といえよう。ピッサヌローク  
では、陸上の公共バスが10年ほど前  
に開通した。それ以前は、タクシー  
ボートが主流で、市民の移動は水上  
交通に頼っていた。川を移動するこ  
とは、かつてはごく普通のことであ  
ったのだ。訪問した浮き家で、水浴  
びや舟での移動が簡単にできるから  
陸の家よりいいよ」と言っていたの  
が印象に残っている。

に留まる条件として、屋根をタイ中  
部の伝統的な形に変えることが求め  
られている。しかも、その家をレス  
トランにする意向もあるようだ。浮  
き家の保存運動が、距離だけでなく  
意識的にも、かえって住人の生活が  
水から遠のくことをもたらし、形だ  
けを残した商業主義的な利用に留ま  
るとしたら寂しい限りだ。住宅とし  
ての本来の浮き家とその生活の実態  
を失い、ただの水辺のテーマパーク  
になってしまう危険性をはらんでい  
る。見た目だけではない、水とともに  
生きるくらしを価値づける必要があ  
る。



上：2棟のように見えるが  
1棟の浮き家。右図と下の  
写真はこの家のもの。  
下：庇下のラビアンと室内。  
この家は幅1m以上のラビ  
アンを持つ。



## ロップリー 水辺の斜面地と住民組織

ロップリーの歴史は、クメール帝国の経済、軍事の重要な都市として始まる。その後のアユタヤー時代には、ナライ王（1656〜1688年）が夏の離宮をつくり、ここで多くの時間をすごした。

ロップリーの町は、南北に流れる



川の両岸に形成されている。東岸が旧市街地で有名な寺院があり、宮殿や商店街が川に開く。フランス人建築家がデザインした宮殿からは、北に延びる川沿いの道に商店街が続いている。一方、南北のロップリー川と支流が合流する西岸は、蒸気の精米工場があり、いわば生産地域となっている。

さて、東岸の川沿いの商店街では日用品から食料品までさまざまな店が軒を連ねている。店主の多くは、19世紀、中国潮州からの華僑で、20世紀初頭にはチーク材の卸売りで財を成した。

この商店街で特徴的なのが、メインストリートの道路から川に向かって伸びる何本もの細い路地だ。飲料品を扱う問屋横の路地では、裏に親族の住宅が1軒、さらに奥の川沿いに3棟の長屋が並んでいる。ほかの場所でも、道路から川に向かって漢



上：雨期の終わった11月、まだサバーンが住居をつないでいた。  
下：乾期の3月、上と同じところに水はない。



上：最も川よりの家は、出前料理店。  
下：食事は出前をカサの下で。

まず、上段の飲料品を扱う問屋は、約90年前から商売を営んでいる。1階道側に店を開き、その奥に作業場と厨房、2階と3階を住居としている。この店舗は、斜面に建つため、自然にできた川側の床下空間を倉庫として活用している。1階の天井の一部が開閉できるようになっているのは、20年前まで米を扱っていたことに、2階の倉庫からロープで吊って、荷の上げ下げをしていた名残である。このように、道側を店舗とし



## タイ中部の水辺の住いと暮らし

川側を川からの荷の搬入や作業のためのサービス空間として、舟運と結びつための合理的な工夫が見られる。

次に、中段は問屋の親族のために50年前に建てられた住宅である。高床式住居ではあるが、床下は最も高いところで1mほどしかない。住宅横にはサン・プー・ブームと呼ばれる土地神を祀る祠が置かれている。祠は水に浸かってはいけないとされているので、通常、雨期でも水はこまめしか増水しない。

さて、斜面下段では、中央に井戸のある広場で、男性や子供はセバタクロード遊び、女性が会話を楽しみながら家事をするといった、和やかな一帯がつくられている。この長屋

群の中心部にある広場には、10cm角の柱がところどころに立てられている。これは、運搬用の棧橋の柱跡である。上段にある問屋は、20年前までロップリー川西岸の蒸気の精米工場から米を運んでいた。船着場の土地は問屋が所有するが、棧橋はテーサバーンという公の市街地自治体が建設、管理する。それゆえ、近隣の店舗も共同で棧橋を使用していたといふ。

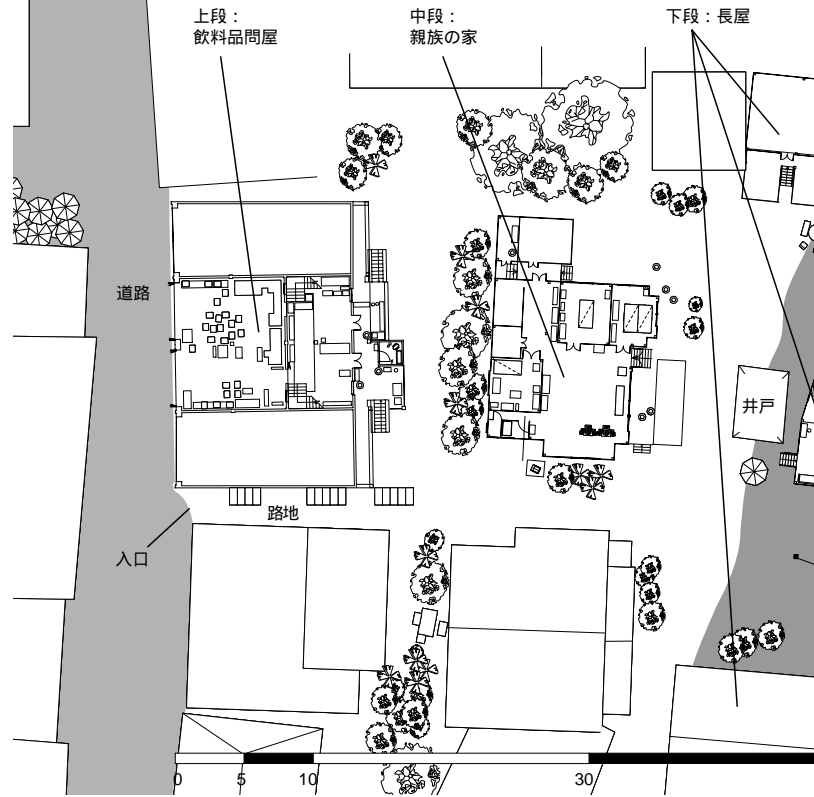
斜面下段の長屋は、いずれも高さ2mの高床式で造られている。3棟あつて、いずれも上段の問屋によって20〜30年前に建てられた。30〜40年前に、ロップリー川上流にダムが建設される前は、雨期になると、これらの長屋の床まで浸水していたと

いう。ダム建設後、乾期には2階が寝室、1階をそれ以外の部屋として利用するようになった。

調理や洗濯の場は住宅の外部にまであふれ出す。広場には洗濯物が干され、調理用のなべやコンロが置かれている。しかし今でも、雨期には膝下くらいまでの増水がある。住民たちは1階の生活空間を移動し、日常の移動手段を確保しなくてはならない。そこで、板をつなぎ渡し、通行のための仮設の棧橋を建設して、雨期だけの道路を造り上げる。棧橋の部材は、上段の問屋の床下倉庫に保存し、繰り返し使用する。棧橋建設の作業は共同で行われ、その際の組織を「チュウイガン」(地域共同体)と呼ぶ。このような組織は、かつて

バンコクのような大都市でも存在したが、住まいの拠点が陸上化するとともに、今日ではその姿を見ることができなくなつた。しかし、ロップリーのような水と共存する地域では、住みよいコミュニティを保つため、共同体がしっかりと生きているのだ。

ここでは、斜面の上、中、下段でそれぞれにふさわしい用途の建物を置き、同時に水との関わり方によって、地面に直接立つものから高床へと変化させて合理的な土地利用がなされているのである。しかも、土地の使い方や住宅の工夫だけでなく、水とともに暮らす知恵が住民の固い組織にも反映されている点は魅力的だ。



上: 飲料品問屋の、開閉できる天井と主人夫妻

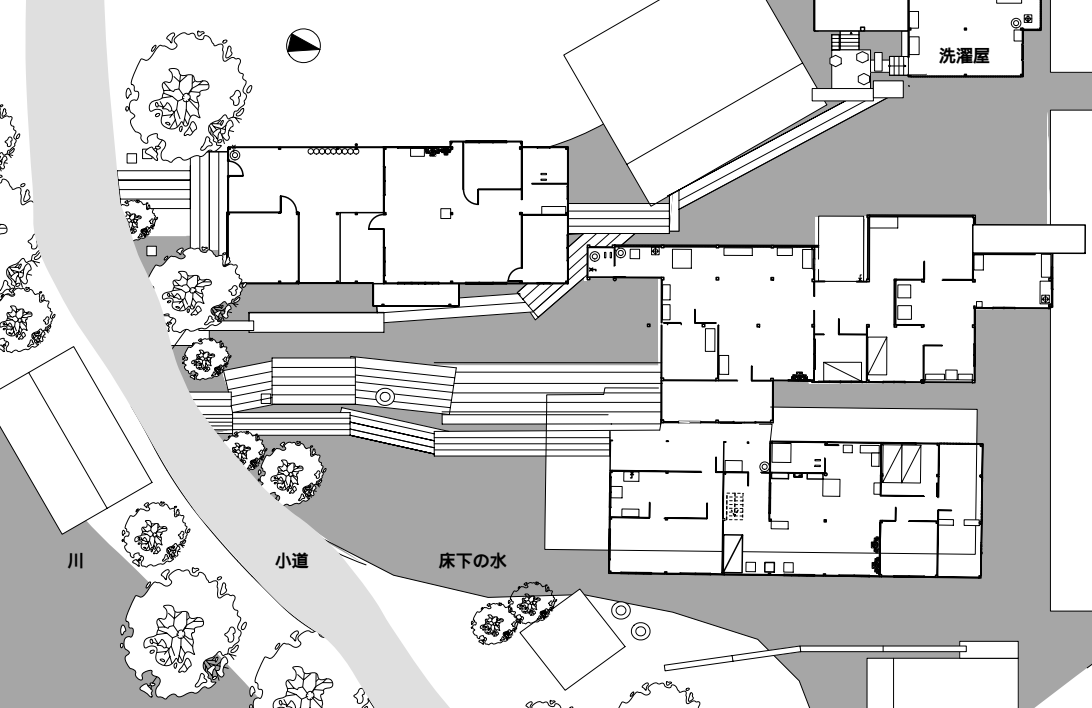
下: 長屋中央の上手、屋根のある井戸はかなり大きい。



道路から路地に入るところにはゲートが設けられている。

路地、川側から。





## ロッブリー サパーン集落 水上のリビング

ロッブリー川西岸では、蒸気の精米工場のまわりに、農村のような静かで穏やか地域が広がっている。東岸に比べて、低く平坦な土地に数十軒単位で点々と集落がある。低湿地であるため、住宅の床下には常に水面が広がり、その上に高床式住居が建つ。

我々が調査した集落もまた、もとも前の小道はなく、前方の川とは直接つながっていた。当時、住宅へのアプローチ手段は船だけであった。今も、住宅は必ずしも小道に面していない。かつては、住民が住宅の間や床下を小舟で自由自在に行き来した風景を想像することができる。それを物語るかのように、住宅の下には今でも舟が置かれている。つまり、舟の通れるスペースさえあれば、他



の住宅との距離や位置関係、アプローチという制約を受けずに、自分たちが住みやすいように住宅を建設できるのである。その後の小道の造成によって、現在は川と家々の直接の結びつきが絶たれた。

しかし、もともと水はけの悪い土地なので、雨期には水がたまり、現在でも集落は水上にある。舟による直接のアプローチを断たれた住民たちは、道から住宅へ入る手段を新たにとらざるを得なくなった。そこで用いられたのが、サパーンと呼ばれる木製の棧橋である。水上に建設された住宅や雨期の増水によって陸を歩くことができない地区では、よく見られる方法である。奥に立地する住宅には、サパーンを作り、狭い板を縦に細くつなげて通路とし、住民は外壁を手つたいに隙間を縫って進む。奥に住む洗濯屋を営む女性は、両手いっぱい荷物を持ちながら慣れた足取りで細く続く20cmほどのサパーンをスイスイと歩いていく。

一方、小道側は板を数枚横につなぎ、150cmほどの幅を持つサパーンを共同で使用している。サパーンは、単に道としての機能だけではなく、洗濯タライや衣服を置き、そこを家事の場として利用することもある。また、近くの木から採れた果物や木の実を干し、作業場としても使う。植栽や椅子を置いて、くつろぎの空間としても機能している。散らかった遊具を見ると、子供たちの遊び場でもあるようだ。こうしたサパーンは、近隣の血縁関係のある家族が共同で建設したものである。女性たちは会話をはずませながら家事を



共有の場としてのサパーン



こなし、その周りを子どもたちが走り回る。まるで、忘れられてしまった、日本の路地裏のような役割を果たしている。

サパーンは、いわばこの集落に与る人工地盤である。そこが、居間の縁側のような共有の場として、住民たちの重要な生活空間となっている。まさに、チャーンともラビアンとも言える場所なのだ。

水上交通によってさまざまな制約を受けることなく成立した集落では環境が変わった今もサパーンを用いることで、生活のスタイルを維持している。タイ人は、外的要因に左右されることなく、その場ごとの水辺の環境に応じて、住みやすい空間をつくり出す術を持っているようだ。



タイ中部の水辺の住いと暮らし

アユタヤー  
マイボートが並ぶ住宅地

観光地としても有名なアユタヤーは、山田長政の日本人町があったことでもよく知られている。

パーサク川をアユタヤー駅の南から東に曲がると、細い水路が伸びている。水路にせり出して茂る木々を掻き分けながら、舟は進む。兩岸は多くの緑にあふれ、暑いはずの日中でも木陰の下は涼しく、舟上で受ける風が気持ちいい。水路の所々では水上菜園が作られている。魚も多く棲み、住民が夕食用のナマズを釣り上げる光景をあちこちで見ることが出来る。多いときには4、5匹の釣果があり、市場で売るときもある。チャーター船の船頭も、家の前の川で釣り竿をたらし、調査が終わるまでの時間を潰していた。

こんな風景の中、水路の両脇には家々が点々と建っている。家は川岸から少し奥に建ち、地盤が確かで洪水時に浸水しないような場所を選んで作られている。護岸はコンクリート製もあるが、木の丸太で土を押さえたものも多く、木板や階段を使って舟から敷地に入る。敷地には多くの水がながれ、周囲は緑で彩られている。この地区の家は高床式住居で、川に正面を向けている。気持ちのいい川側には居間などの主室を置き、奥に厨房やトイレ、風呂を配置している。特に、家正面の川に向かって付けられた階段が象徴的だ。現在は後背地に道路が造られ、陸への依存度が増して、車を持つ家もあるほどだ。だが、家も人もいまだに

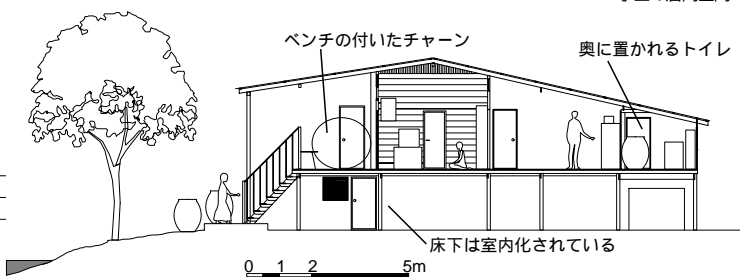
川からのアプローチを重視し、水路を中心に暮らしている。

比較的大きな都市であるアユタヤーでも、そのことは水の使われ方に表れている。このあたりには水道がまだ通っていない家もあり、洗濯などに川の水を使っている。また、ほとんどの家が現在でも舟を持っている。20年前までは、洪水時だけでなく、舟を使って商品を売りに行くこともあった。しかし、2年前にダムが完成してからは、一年を通して水位に変化はなく洪水も減った。今まさに住民の生活が変わろうとしている。だが、それでもまだ舟を使う家は多い。そのうえ、船着場にあずま屋を増築して、水上に風通しのよい理想的な居間空間をつくり出す家もある。それが実に気持ちいい。住民は、むしろ積極的に川に近づいているようだ。水辺の利点を彼らはよく知っているのだろつ。

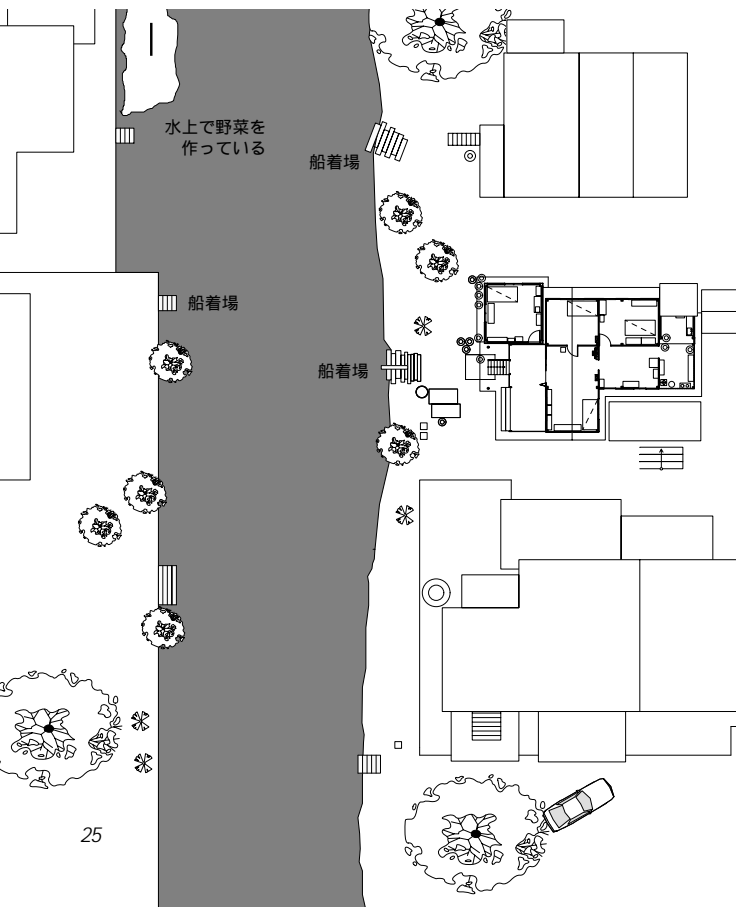
この地区で興味深い家に出会った。1階は完成していて、ベッドなどの生活用品が置かれているが、2階は未完成で壁が無い。費用がきたら建設を再開するという。主人が大工だということも関係しているであろうが、住まいに対する柔軟な考え方には驚かされた。タイ人の住宅全般に言えることだが、増築や改築、移築などにも同じような考え方が根付いている。彼らは家族が増えれば増築し、引越しのときは家財道具とともに家ごと移動する。短期間に完成させることを競い合い、一度住めば手を加えず、あとは捨てるだけの日本の住まいと日本人の考え方が、いかに負しいかを思い知らされた。



水上の居間空間



これが一軒一家族の家



## アユタヤー ムスリム住宅のタイ化

アユタヤー王朝は、海外貿易の拠点として、400年にわたって発展を遂げ、1767年に栄華の幕を閉じた。発展の要因となった管状につながるチャオブラヤー川、ロップリ川、パーサクク川など、恵まれた水路網は今も失われていない

しかも、水路に沿って高床式住居が並び、人々はその水と密接に結びつく生活をしている。舟による集落へのアプローチも、常に水路が生き

ていることを感じさせられるものの一つだ。水辺の集落や住宅へは、道路からアプローチするのが非常に困難である。タイの多くの都市で進む陸上化、水路の減少化という現在、アユタヤーに住む人々がいかに水と生活を重視しているかがわかる。だからこそ、水辺の集落には必ず一つ、また大規模な住宅であれば専用の船着場(ター・ルア)を持っているのだ。

海外貿易によって多民族都市となったアユタヤーは、現在でもバンコクに次いでタイ中部第二のムスリム人口を抱えている。都市を囲う楕円

形の水路の南側には、アユタヤー時代からの3つのムスリム集落がある。その一つ、ワッターナーと呼ばれる船着き場の周りに広がる集落を見ていこう。船着き場から陸に上がると、まず目に付くのがアユタヤーの太陽に照らされ輝くモスクである。川が間近にある環境では、当然、彼らにとって水との共存は大きな課題である。近年、このムスリム集落では、一年を通じての水位の変化が20〜30cmしかない。しかし、この地域でも7年前に大洪水があり、床下の柱の3分の2まで水が上がった。こうしたことに備え、今も安定した土地の

上に、高床式で住居を築いている。多くの人々によって水路が使われているが、安定した土地を持つことは、集落内の生活において次第に陸化することを意味している。この集落では、船着場が集落の入り口であると同様に、陸側にもムスリムスタイルのゲートを持ち、川と陸の両面性を示している。

陸化は、集落の形成にも大きな影響を及ぼした。彼らの宗教施設であるモスクや共有の船着場は、生活の重要な要である。したがって、それらの近くに集まって住むには、陸によってつながる集落が都合がよい。

それゆえ、仏教徒のタイ人集落はあまり多くの住宅が集合せず、一軒ごとが水に面しているのに対し、ムスリム集落はすべての住宅が水に面することよりも、むしろ公共空間のモスクや船着き場を中心に面的に密集して広がっているのだ。

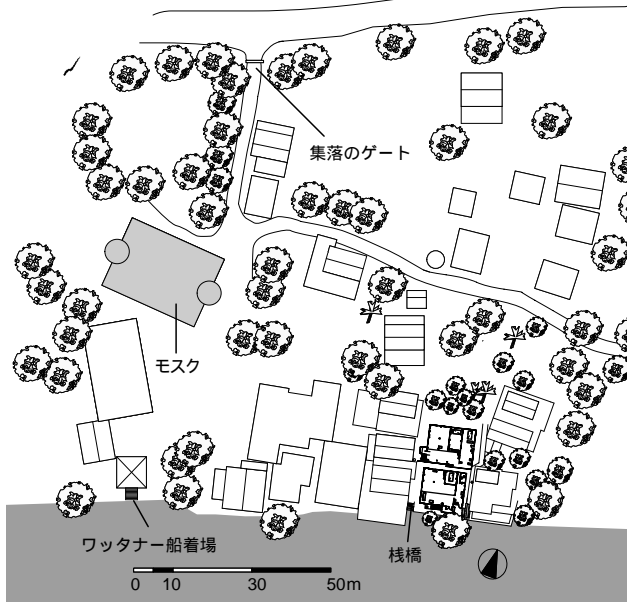
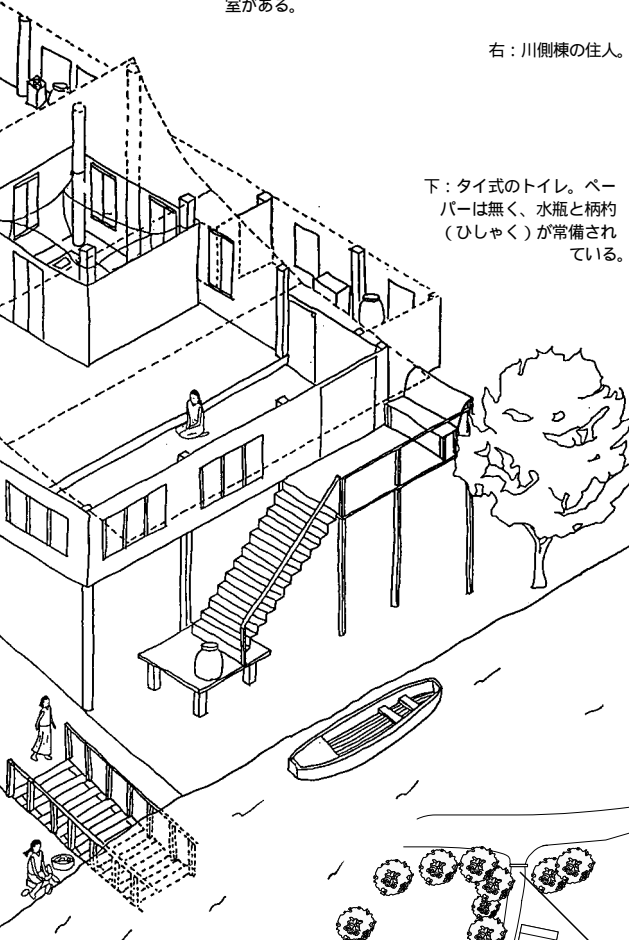


右：川側棟の住人。



下：タイ式のトイレ。ペーパーは無く、水瓶と柄杓(ひしゃく)が常備されている。

上：写真左手にチャオブラヤー川を臨む大きな窓があり、涼しい風が入ってくる。右手に、壁で囲われた寝室がある。



## タイ中部の水辺の住いと暮らし

場合には、住宅を新築するといった方法をとるのもムスリムの特徴だろう。この集落が面的に形成された理由もここにあると言える。また、どの住宅もほぼ同じ規模であるという平等性もムスリムらしい。しかし、タイにおいて、高床式住居はムスリムの人々の習慣ではなく、本来タイ系の人たちの住まいである。タイ人の住宅のタイプを選んだ理由には、もちろん水との共存が挙げられる。水辺にふさわしい住居をムスリムの

人々も認識し、宗教とは関係なく柔軟に取り入れている点は興味深い。増改築をあまり行わないこの集落では、階段（バンタイ）を上がり、屋根のない空間（チャーノン）から、一段高くなった軒下の空間（ラヒアン）へ、壁にしっかりと囲まれた寝室（ボン・ノン）という、最もシンプルな高床式住居の構成をとっている。特に、階段下に足を洗うための水がめを置いている点は、いかにもムスリムの住宅らしい。チャーノンとラビ

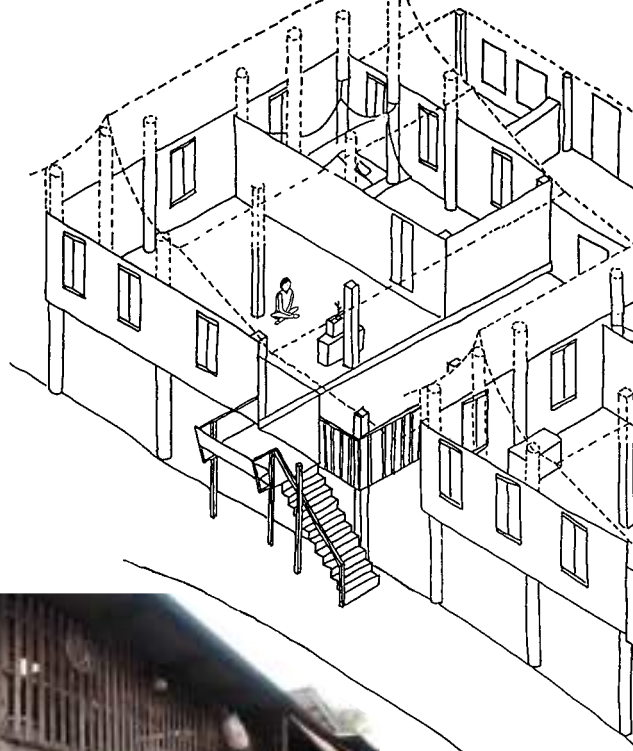
アンには、壁と屋根が取り付けられ、チャーノンラヒアンと呼んで、生活の多くをここで過ごす。川沿いには大きな窓と扉を設け、のどかなチャオプラー川の流れを臨みながら、生活するスタイルが受け継がれている。住宅の脇には川へ向かう通路がある。その先端にはサパーン・ロン・ナムと呼ばれる川へ降りるための棧橋が造られている。住民が途切れることなく使うその棧橋は、共有の生活空間といえるだろう。食器を洗う

主婦たちは、そこで作業とともに井戸端会議に花を咲かす。水浴びをする少年たちは笑顔を見せながら歯を磨き、女性も昔からの風習そのままに水浴びをする。アヌターでは、人々の生活のみならず、集落や住宅にとつても、水がきわめて身近な存在となっている。そのうえ、タイ系とムスリム系では水に対して集落の空間構造に違いを見せつつも、やはり個々の住居は水辺にふさわしい高床であった。バン

コクなどの都市では、水と日常の生活が徐々に切り離され、高床式住居の床下を壁で囲み、屋内の生活空間として改築することが多い。しかし、ここでは床下に変化はなく、舟が備え付けられていて、増水時でも水との共存を常に図ることができる。タイ本来の水と人々の暮らしがそのまま生きている。



上：2棟の後ろから。隙間から川が見える。  
左：屋根は高く反り上がっている。



ムスリムの住宅は階段下に、足を洗うための水がめや水槽を設けている。





スコータイの住宅・厨房

## 水と暮らし

増改築が普通のタイ中部の住宅の多くは、各棟の軒先が互いに接し、その部分に大きな雨樋が設けられる。それは、日本と違って下水に導くためのものでなく、樋の先端の真下に水がめを置いて、雨水を貯めるためのものである。雨期には、家族が一年間使用できるだけの雨水を集中して貯める。住宅内や敷地には、雨水を貯めている水がめだけでなく、貯まった水を使用するまで寝かせてある水がめ、今まさに使用している水がめなど、大小さまざまな水がめが置かれている。

水がめの大きさの違いは、その利用方法に関係する。住宅の軒下に置かれた水がめは、直径、高さとも130cmもあり、直接雨水を貯めるためのものだ。いっばいになれば、樋の角度を変え、また別の水がめに貯水する。使用の際は、そこからポンプやバケツを使って屋内に移す。また、家のまわりや敷地の隅には、植栽や花壇、ちよっとした畑用の水として、中くらいの水がめも置かれている。チャーンの一角にコン口と一緒に置かれている屋内の水がめは、調理用に使われるもので、直径65cm、高さ85cmほどで、厨房の隅に置かれている。スコータイの住宅では、ビニールシートを使って直接厨房のみに雨水を貯める工夫も見られた。いっばいになれば、シートを床下に向けるだけで簡単に排水ができるというわけだ。水は、ただ自然に任せただけでよい。

現在、タイの住宅の多くには、水道が通っている。にもかかわらず、これほどまでに雨水を貯めるのは、その味に理由があるという。水本来の味をタイ人は知っている。水不足の乾期に、水道水を飲まなければならないときでさえ、一度水がめにためることで味を落ち着かせるほどの徹底ぶりである。かつて茅葺きの屋根のころは、茅がる過作用を持ち、異物を通さず清らかな水だけを得ることができた。トタン屋根が一般的になった今は、雨水さえも直接飲むには、多少寝かせる時間が必要だという。

水道水を使わない理由は、宗教にもあるようだ。かつては、雨水だけではなく、地区の核となる寺院の泉を住民が共同で利用していた。どの家庭も、毎朝、泉まで水を汲みに行くのが子供の仕事であったという。水は仏からの恵みそのものである。伝統的なタイ中部の住宅には、まだ水洗トイレが普及していない。以前は、敷地の隅に穴を掘ってそこで用をたし、穴がいっばいになると別の所にまた穴を掘り使用する、ということが繰り返されていた。最近では、チャーンの脇や、寝室裏の別棟にトイレが設けられている。便器は和式で、そこから土管が地中に伸び汚物が溜められる。そこがいっばいになると、トイレも別の場所に移動する。

タイの川を舟で通ると、水辺で水浴びをしながら子供たちの姿が印象的だ。タイの人々が川の水で歯を磨き、体や髪を洗う様子は、我々が風呂場でするそれとまったく同じである。また、舟の少ない場所では、女性もハー・カオ・マーという布地を体に巻き、川で一日に何度も水浴びをしている。昔からの習慣であるという。女性たちは川で洗濯や食器洗いもする。限りなくつながり広がる川はすべてのタイ人のものであり、そこで日常の行為が自然に行われるのである。船着き場やあずま屋などでも食事をしたり、談笑したりと、タイ人は住宅以外の水辺にも快適な生活空間を持っている。そこは、近隣の人々とのコミュニケーションとして欠かせない場でもある。こうして、ゆったりと流れる川の横でのんびりと過ぎる時間を共有すれば、タイ人の穏やかな性格の理由もわかるような気がする。



屋根の樋の真下に水がめが設けられている。



# コラート高原の溜池から見る タイ社会の移り変わり

森田敦郎 もりた あつろう

東京大学大学院総合文化研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員

1975年生まれ。専攻は文化人類学。現在、東北タイ・コラート県において産業化と社会変動について調査中。

「この村にわたしが移住してきたのは、ここに大きな池があったからだ。ほら小学校の前に池があるだろう。あそこに池があったから、わたしはここに村を建てることにしたんだ。あのころここは水が豊かで、ウドムソンブーンだったんじゃない。」

東北タイ地方コンケン県、市街地から50kmほど離れた農村で村の来歴を尋ねた私に、村の老人はこう語って聞かせた。雨期にもかかわらず雨に恵まれなかったその年、村は灼熱の太陽の下で乾ききっていた。だからか、老人の「水が豊か」という場違いな言葉は印象深かった。

## 溜池の謎

コラート高原と呼ばれる東北タイ地方一帯は、その乾いた気候とやせた土壌で知られており、タイ国内でも最も貧しい地域である。この地方をバイクで走っていると、村の片隅にしばしば大きな溜池があるのが目に付く。東北タイの農村はたいいてい密集した塊村なのだが、その密な集落にはたいいてい外側に自然の池を拡張した四角い溜池が築かれている。先ほどの老人の言葉は、その池の来歴を尋ねたときの答えである。

これらの溜池には実はちょっとした謎がある。それは、使いみちが今一つはつきりしないのである。まず、たいいていの村では池の水を大して利用していない。水が不足していると盛んに言われる割には、池の水を農業用水に使うわけでもないし、たんぱく質が不足しているといわれる割には、魚の養殖をするわけでもない。生活用水や水浴びに使われているのを見ることがほとんどない。しいて言えば、ときどき水牛の水浴びに使ったり、休日に若者が釣りをしていたりするぐらいだろう。

その一方で、村人に聞いてみると、先の老人が言うように、村にとって池が歴史的に重要だったことを感じるものがしばしばある。さらには池という言葉が村の名前に使われることも多い。例えばこの地方でよくある村名に、ノーンサードとかノーンサワンとかノーンブアという風に、ノーンがつく名前がある。このノーンは池や沼という意味があり、上の村名は直訳するとはじめから「きれいな池」「天国の池」「蓮の池」というような意味になる。

古くは村人にとって非常に重要だったことをうかがわせる一方、今ではあまり活用されていないように見える溜池、これらはいったいどんな歴史をたどってきたのだろうか。

## ウドムソンブーンを探しに

こういうことを知りたいなら、村人に聞いてみる、というのが一番手取り早い方法である。しかし、歴史を聞くことは難しい。

そもそも、現在コラート高原に住んでいる人々は、タイ系民族のグループであるラオ族の血を引いており、ここ200年ほどの間にラオスから移住してきた。彼らは農民であり、戦乱や土地の不足、そのほかさまざまな理由から故郷を離れて、当時は未開の地であったコラート高原に移住してきたのである。その後、土地が豊富だったコラート高原では、しばしば移住が繰り返され、次々と新しい村が建設されてきた。

冒頭の村は60年から70年前に建てられた新しい村だった。そのため、村の建設を覚えている老人が生きているという貴重なケースだったのだ。

この地にやってきたラオ族にとって、移住して村をつくる際のキーワードとなったのが、老人が口にした「ウドムソンブーン」という言葉。タイ語で「豊穡な」という意味であり、東北タイの農民の間では、水

が豊かで土地が肥えた場所という意味合いがある。かつてコラート高原で移住と開拓が盛んに行われていた時代には、「ウドムソンブーンを探しに」というのが移住の合言葉だったのである。

おそらく、灼熱の荒野を旅してきた農民たちにとって、自然の池は、そこがくぼ地であり、周囲から水が集まってくる所だというしるしだったのだろう。

だが、この池の水は農業用水に使われたわけではないうである。むしろ農業用水のためにはそれぞれが農地に個人で池を掘るのが普通である。村の集落から外れて、農地に入っていくとそのような灌漑用の小さな溜池をいくつも見る事ができる。では、村の池はいったい何に使われていたのだろうか。

その答えはどうやら生活用水といったところにあるようである。洗濯や水浴びなどの日常の水仕事に、池の水が使われていたようである。ただし、もともとタイでは雨水を藁に貯めたものを飲み水として使っているため、飲み水に使われたことはない。今でも農村では、家の軒下には大きな藁があり、多くの家では屋根から雨樋を通して貯めたその藁の水を飲んでいる。

このように、溜池の水は飲み水以外の、洗濯や水浴びなどの生活用水として使われていたようである。ラオ族の農民たちは、このように自然の池を見つけそのそばに村をつくった。そして、しばしば共同で池を拡張し、雨期に降った雨を貯蓄できるようにしていたようである。先ほどの老人は池を拡張したときのことを生き生きと語ってくれた。何代目の村長の誰が指揮を取ったのか、どんな風に拡張したのか。こうした事業は、当時の人々にとって長く心に残る大きなイベントだったに違いない。

## 溜池の下のクメール都市

村の池についてはとりえず解決したように見えたのだが、少し調べていくと溜池があるのは何も村に限らないことがわかってきた。コラート高原ではたいいていの都市も大きな池や湖のそばに作られている。ではこれらの池はもともとそこにあった自然の池だったのだろうか。

村人に池の来歴を尋ねると彼らはたいいてい、そこにもともと自然の池があった、という。確かに池の多くはもともと自然のものである。

しかし、いろいろ調べてみると必ずしもすべての池が自然のものではないかもしれないということがわかってきた。そこから見えてくるのは思いもかけない壮大な歴史である。

コラート高原の大部分は、かつてアンコールワットを建設したクメール帝国の支配下にあった。アンコールワットが建設されたのはほぼ同時期、11～12世紀にはコラート高原にも相次いでピマーイ、サコンナコンといった都市が建設された。クメール帝国の絶頂期は13世紀といわれ、その版図はカンボジアとコラート高原を越えて中部タイのチャオプラヤー川流域と南ラオス、中部ベトナムまでに及んだという。

クメール帝国は支配下の各地に首都アンコールワットと共通のプランを持つ都市を建設していった。その典型は十字の回廊を持つ寺院や宮殿の傍らに「パライ」と呼ばれる大きな人造池を配し、さらに城壁の外側を二重の堀で囲むものだったという。今遺跡として残るピマーイや、後にタイ族が占拠して王都としたスコータイやロップリーは元来このようなクメール都市であった。

コラート高原では15世紀のクメール帝国の衰退以降、こうした都市は次々に放棄され廃墟となっていた。そしてラオ族が南下を開始する18世紀ごろにはコラート高原は無人の森林地帯となっていたのである。新たにやってきたラオ族は新しい村を作るだけでな

く、こうした古い都市の跡に再び町を作った。だから、あとからやってきたラオ族が利用した池の中には、かつてのクメール人の村や都市に作られた溜池、「パライ」だったものもあるのである。

このような例の一つとして、コンケン県にあるブアイノイ郡がある。ブアイノイには小さなクメール遺跡があり、その遺跡から100m弱のところにある大きなパライがある。100年ほど前にここに移住してきたというラオ族の村人たちは遺跡のかたわらに村を作って住んでいる。今は遺跡も修復され、パライもきれいに拡張整備されているが、かつてパライの水は隣接した水田の農業用水に使われていたという。そして現在ではパライのほとりに建てられた病院がこの拡張された池から若干の水を取水しているという。

この地方ではクメール遺跡と都市が共存している例は数多い。有名なクメール遺跡であるピマーイは町そのものが遺跡の内側に建てられている。また、サコンナコンは四角形の堀で囲まれたかつてのクメール都市の真上につくられており、堀の内側にはまだパライが残っている。

コラート高原で見かける何の表替もない溜池も、その背後を探っていくと幾重にも重なる歴史の積み重ねが見えてくる。そこにはクメール帝国から続く数百年単位の長い歴史の流れと、数十年単位で刻まれたラオ族の村人たちの生活の歴史が重なり合うように流れている。

こうした歴史の流れの締めくくりとして、最後にここ10年の池を巡る動きを見てみよう。

## 役割が変わる

現在、集落の溜池のほとんどはもはや生活用水にも農業用水にも利用されていない。しかしその一方で、各地の池を見てみるとここ最近、拡張や整備工事が行われたものが多くに気づく。

こうした工事は多くは、政府によって行われている。ブアイノイのように観光地として遺跡を修復・整備する中でパライが拡張されたり整備されたりした所も多い。パライではない普通の村の池もここ数年で急激に整備が進んでいる。重機によって底を深く掘り直し、きれいな四角形に岸を整備するというのがこうした整備の基本である。こうした池には必ず看板が立てられている。そこには、何年に内務省によって拡張工事が行われ、その後きれいになった池が国から村の自治体に贈与されたことが記されている。

中央集権国家のタイには、最近まで村落に自治体と言えるようなものはなく、公式には地域の資源は国家が直接管理していた。村の池もまた例外ではない。しかし最近の地方分権推進の中で、新たにタンボン（行政区）自治機構といわれるものが設立されてきた。そして近代的な地方行政制度が成立してから一元的に内務省が管理していた村の池も、この自治機構の成立とともに再び村人の手に返されたということらしい。

こうして新たに整備された池は、主に地域の人たちの憩いの場として利用されているようだ。市街地に近く、最近急激に住宅地化したような村の池の中には公園とできている。整備されたものもある。それほど整備されていない池でも、休日には近所の人々が釣りをしたり、周りの木陰でのんびりしている姿を見ることが出来る。

長い歴史の中でクメールのパライからラオ族の村の池へと変化したように、村の池の役割も人々の生活の変化と共に移り変わりつつあるらしい。

# 満水のタイ写真紀行

『水の文化』編集部



左から、ロップリーのピックアップバス、アユタヤーのミゼットタクシー、新交通システムBTS、バンコクの路地に積まれた土嚢。トゥクトゥク、ボート、飛行機、等々、タイの多様な交通機関にお世話になった。



雨期が終わった11月のバンコクは、気温も低くなって、ようやく過ごしやすい季節を迎える。つまり、夜寝るときにクーラーを入れる必要のない気温になってきているのだが、タイの人たちは寒い寒いと言ってジャンパーを着込んでいる。それもそのはず、ホテルやレストランでは、空調の温度設定が20度を少し上回るくらい。とてもじゃないが、凍えてしまう。

前回訪れたのは、3月の末。その時期は40度近い酷暑で、朝昼晩のシヤワーは欠かせなかったが、タイの人たちは、平均1日5回の水浴びが当たり前だという。だから狭い乗り合いバスで肌が触れても、サラツとしているし体臭さえ感じさせない。スーパーマーケットの歯磨粉、石鹸

売り場が充実しているのもうなづけるというものだ。が、タイ王朝が栄えたスコータイに近いピッサヌロークを訪れたときには、びっくりするものと出会った。

それは、チャオプラヤー川の上流、ナン川に浮かぶ浮き家だ。

## トタン屋根の浮き家

ピッサヌロークには、まだ40軒ほどの浮き家が2つの大きな橋をはさんで転々と並んでいる。下流に向か

って左側は護岸工事が施された場所が多く、浮き家はその反対側の右側に取り残されたようにあるのだが、その暮らしがなくなってしまうのもそう遠くない話のようだ。

20世紀初頭に撮影された写真を見ると、川いっぱいに浮き家が並び、家と家との間には人工地盤ともいえる棧橋が張り巡らされている。タイの伝統的な尖った妻壁を持ち、屋根は板や藁が葺かれている。その藁葺き屋根も、現在は茶色く錆びたトタン屋根に代わられている(さぞかし雨音がうるさいと思うのだが)。

しかし屋根の素材自体が板や藁からトタンに変わっても、藁葺き屋根は浮き家以外の建物にまだ見ることができる。それは、建物とも呼べないような代物なのだが、昼寝用のスペース、サーラー(写真B)だ。竹をヒモで組合せたフレームに、藁の束を括りつけたものが載せられている。かつて浮き家の屋根を言っていたスタイルも、写真をみるかぎり、これとごく近いものと想像できる。日本の茅葺き(これも茅不足から、藁葺きに変わりつつあるのだが)とは趣きがずいぶん違う。厚さ、密度、結索方法、仕上げ方、どれを取ってみてもまったく違う。雪の重みに耐えなくてもいいというだけでも、屋根自体の構造、部材の大きさなど

20世紀初頭のバンコク市内を流れるチャオプラヤー川、手前がトンブリー、向こう岸左が王宮。浮き家が、中央から右側へびっしりと何層にも並んでいる。右奥の川が蛇行した先には、大型船舶が3隻ほど停泊しているのが見える。Pipat Pongrapeeporn *Panorama of BANGKOK in the reign of King RAMA IV SAMNAK PHIM MUENG BORAN*, 2001より





左：増改築、特に移築が多いタイの住宅。壁と屋根仕上げ材を外したら、人力でも動かすことができる、とても軽いものだ。写真の高床式住居は、3kmの距離を運ばれていった。  
 Pierre Le Roux *The Journal of the Siam Society Vol.86*, JSS, 1998 より  
 右：浮き家の勝手口。壁は竹を網代編みしたもの。  
 下中央：浮き家の洗面所は上流側のデッキ。写真の奥には、まな板スペースもある。  
 下左：川は画面左から右に向かって流れている。その家にとって上流側に設けた洗面所やまな板スペースも、隣接した家の下流側に設けたトイレの真向かいということになることが多い。



など、違っていても当然なのだ。  
 屋根だけではない。壁は、筵と言  
 ってしまつては失礼かもしれないが  
 竹の皮を網代に編んだもので造られ  
 ている（写真A）。もちろん、板壁  
 やトタン壁もあるのだが、とにかく  
 「軽く」がテーマである。床を水面  
 から15〜30cmほど浮かせるための浮  
 力は、竹の束を水中に沈めること  
 で作り出しているのだから、うわも  
 のはできるだけ軽いことが第一条件  
 のである。  
 軽くてもすんでしまつたには訳が  
 ある。実はタイにはほとんど風が吹  
 かない。だから軽くすることを最優  
 先できるのだ。インドシナ半島の西  
 側、チャオプラヤー川を中心とした  
 デルタ地帯には、台風が来ない。風  
 速15mの強風圏内を持つ台風が来な  
 いどころか、日本のような集中豪雨  
 すらもない。もちろん例外はあるが  
 平均して強い上昇気流も下降気流も  
 ないのだから、強い風は吹かない。  
 したがって雨も静かに降るのである。  
 だから壁は網代で充分、横殴りの雨  
 風を心配する必要はない。  
 ひるがえって日本の屋根はどうだ  
 るつか。普通の瓦の2、3倍はあり  
 そうな西本願寺の瓦は、1つ7kgと  
 いう代物だ。瓦は耐火性に優れた屋  
 根葺き材だが、その自重が耐風性を  
 も生み出している。だから台風銀座  
 とも言われる沖縄地方の住宅は、重  
 い瓦屋根の家が伝統的に見られるの  
 だ。  
 地震がなければ耐震構造が発達し  
 ないのと同様、風のない地方には耐  
 風構造の発達はない。



現在、庶民の住宅のほとんどは、屋根がトタンで葺かれており、昔を彷彿とさせる藁葺き屋根には出会えなかった。唯一出会った藁葺き屋根は、スコタイのある庭に作られた昼寝場所。メンテナンスの手間などを考えると、タイでさえこの規模のものが限界ということか。



19世紀中頃のアカタヤー。流れの向こう側に見えるのが、竹の上に深く藁葺きの浮き家。手前は丸屋根のボートハウスで、屋根の素材は板材と思われる。ともに建物の間には杭が立っている。Karl Döhring, *The Country and People of Siam, Land und Volk*, 1923より

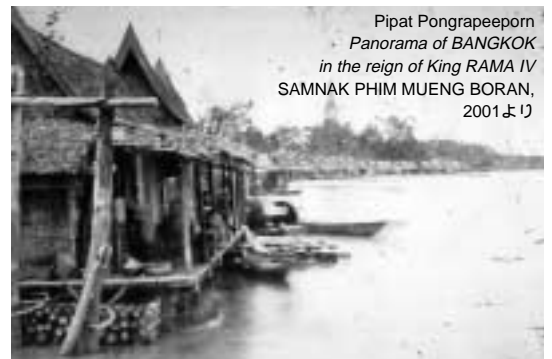


上：軒下にあるリールに巻かれているのが、電源コード。  
 右：ロープのモヤイは、隣の住宅へ行く棧橋の上を通過して河岸に固定されている。  
 下：浮き家は、手前と奥の2本の竹で河岸にもやっている。中央に鳥が1羽遊んでいるが、この茶色い川には小魚をはじめとする生きものが実にたくさん棲んでいる。  
 左：河岸の階段の横で、シャモを飼っている。



船が岸壁に停泊する場合は、大きく4本の舳い綱で船を繋ぎ留める。外側に向かうように船首と船尾にそれぞれ1本ずつ、船の中央から交差するように2本とるのが、舳い方の基本である。潮の流れがある場合は、流れに従ってこの舳い方が変化していくのだが、船にとっては潮流よりも風のほうが恐いので、どちらから吹くかわからない風に対抗するためには、この基本に忠実であるべし、というのが一般的。ヨーロッパで見られるハウスボートは、そういう意味から言っても立派に船の範疇に入るのだが、タイの浮き家は、舳い方から見たら船とは呼べない。川の流れしか、浮き家にかかる力を考慮に入れていない舳い方をしているからだ。

### 舳い



Pipat Pongrapeeporn  
 Panorama of BANGKOK  
 in the reign of King RAMA IV  
 SAMNAK PHIM MUENG BORAN,  
 2001より

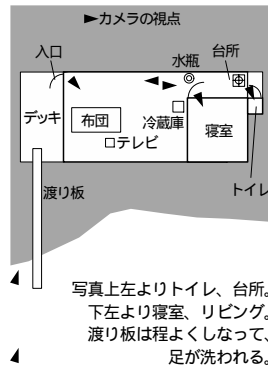
船に使われるロープには大きく2種類の素材がある。一つは伸縮性のない、カーボンなどの化学繊維を縫い合わせたもの。帆を上げ、固定するためには、伸び縮みのない素材が適している。もう一つは綿に代表される伸縮性があるもの。錨と船、岸壁と船を舳う際に使われる。風の力を吸収してくれるため、大型船でも舳いロープには巨大な綿製品が使われる。

船に変わらぬように3点くらいからロープを出しているのだが、そのロープを受ける川岸側は1カ所に集中することが多い。つまり3点から出されたロープは、いろいろな方向からかかる力をまったく想定せず、単に強度として3本出されているのだ。人が作った杭などの場合は、強度的に弱いので川岸側も何カ所かに分散する場面が多いが、それこそ太い丈夫な木が生えていたりすれば、本当に1カ所に集中して舳うている。ただ、ロープの長さはやはりそれなりに必要だ。川岸がすり鉢状になっているので、舳うている杭などと家との距離が遠いからだ。



11月の初め、雨期が終わった直後のためか大量の土砂を含んだ支流がロップリー川に合流。





節ができない上に、伸縮性がないので引張られる力を吸収することができない。しかし、水位の上下にのみ対応できればよしと考えるのであれば、竹を利用するのも納得がいく。近年電化製品の普及で、浮き家の中にも冷蔵庫とテレビは必ずあると言っても過言ではない。屋根にはアンテナがそびえ、川岸に延びる電源コードは防いロープと同じく調節可能な工夫が凝らされている。しかし、家の位置が動かないのであれば、本当はその必要はないはずなのだ。いずれにしても、上流方向への強風や、川岸方向からの風は有り得ないと考えなければ、この浮き家の航い方は説明がつかないのだ。

### ゆっくりした流れ

川の流れの速さは、秒速50cmくらい。1ノット(時速1・82km)あるかどうかである。潮の満ち引きも、東京湾の浦賀水道で5ノットだから、それに比べれば本当にゆっくりした流れである。

風が吹かないのだから、当然波も立たない。

波といえば、バンコクあたりのチャオプラヤー川を往来する船の引き波は、激しい。しかし満潮になると堤防すれすれまで水位が上がり、船付き場の浮桟橋は、陸地よりもはるかに高くなってしまっただが、1日2回くるこの満潮時には、船のスピンドは逆にゆっくりになる。それもコンクリート護岸堤防近くでは飛ばしていた船が、水辺に民家が並び堤防がない地域に入った途端に超低速

になる。この配慮はヴェネツィアの水上バスにも見られるのだが、ルール以前のモラルの問題。自らが起こす引き波の影響に心を砕く船乗り、志の高さを見た思いだ。傍若無人に振舞う日本のプレジャーボートのスキッパーに、爪の垢を煎じて飲ませてやりたい。

この船乗りたちが活躍するチャオプラヤー川河口から標高1000mのスコータイまでは、国内線の飛行機で1時間強、400km近くの距離がある。そしてその勾配は0・25/1000。日本の一般住宅の排水管は、1/1000で施工されているので、それと比べても2割強しかない。関東平野を横断する利根川で、河口から標高200mの前橋までが約200km。その勾配はちょうど1/1000である。ちなみに前号で紹介した江戸の玉川上水の勾配が3・3/1000。こう見ていくと、チャオプラヤー川の勾配はかなり緩やかなのである。

チャオプラヤー川の流れは、多くの土砂を含むため、その水色は赤茶けている。また、流域はもともと川の氾濫でできたデルタ地帯で、その流れがすべての土地を覆い尽くしてきただけあって、本当に真っ平らだ。たまに小山があるが、山頂だけが平野に取り残されて、瀬戸内海の小島のように裾野がまったくない地形をしている。人が盛り土をして高低をつけなければ、どこまでも平らだ。その流域に降りそそぐ水量たるや、川1本や2本ではとても受け止めきれない規模ではなく、雨期後半ともなるとデルタ地帯全体が川となる。こ



観光開発のひとつであるナイトバザールが、向こう岸に建設されている。ここには水上マーケットのような、水側からのアプローチが見られない。雨期直後なのに水位が乾期と変わらないのは、建設作業のためにダムが水量を調節しているからだ。



この半年前には、手前のような浮き家が対岸にも並んでいたのだが、新たな村に引っ越していった。

これは洪水でも氾濫でもない。河川敷きが乾期に干上がったってしまい、地図上で地面とされているだけなのだと叫びたくなってしまう。

干上がったってしまつた河川敷きには、もちろん浮き家はない。(否、なくなつてしまった)。水がないときに浮力を生み出す竹管が潰れてしまい、いざ浮くべきときに用をなさないからだ。(数は少ないが、竹管が潰れないように工夫された浮き家もあつたそう)。そういった地域には高床式の家が建つており、その集落以外には水田が広がっている。もちろん、今では浮き家に比べたら高床式住居が一般的で、数も断然多い。ただ、床下すれすれまで水がきている高床式住居を見るかぎり、浮き家との見た目の区別はつきにくい。

このデルタ流域では、チャオプラヤー川をはじめとして雨や風、水の氾濫。そして季節の流れさえもがゆつくり流れている。そう、人を取り巻く自然環境のすべてが、ゆつくり、ゆつたり流れているのだ。だから私たち日本人が考える洪水とか土石流、暴風雨、台風、津波、高波など、いつ逃げ出すか命の危険の判断をしなくてはならないような水の自然現象は、そう頻繁には起こらない。

水に脅威的な要素がないのだから、水に対する危機感は生まれにくい。まして肥沃な土を運んでてくれる水命の糧の源に対して、恩恵以外の感情を抱けようか。

しかしチャオプラヤー川のゆつたりした流れも、人の手が加わつたことによつて変わつてしまった。

1957年、スコータイの南17

0 kmにあるナコーンサワンに、チャオプラヤーダムが建設された。山岳地方(北だけではなく、東、西側にもある)に降つた雨がデルタを巡り、バンコクに流れ込まないように治水政策が始まり、現在も進行中だ。

このデルタ地帯ではもともと浮き稲(水かさがあるところに育つ稲で茎が長い)の栽培が主で、それは広大で肥沃な河川敷き水田に最適な品種であつた。しかし、経済成長の波の中では、いかにせん収穫量が少ないものだったので、水を人工的にコントロールし、収量の多い、また短期に収穫できる品種の稲作をするために、利水としてもダム建設が始められたといつわけだ。

ダムの容量一杯まではいいのだが、満タンになつてオーバーフローしそうなときには、事前に放水が始まる。放水による水位の上昇、流速の変化は、浮き家が舳いロープでコントロールできる域をしばしば超えてしまふ。浮き家での生活はもはや困難となり、ダムのお陰で水の氾濫がなくなつた地域での生活に移行していくことになる。それは、長い歴史の中で育まれてきた生活習慣を変えざるを得なくなること。川から陸へと移住した人たちの「浮き家の伝統は消したくないが、仕方がない」というフレーズに返す言葉が見当たらなかつた。数千年も続いたゆつたりした流れが突然、急流に飲み込まれたよつなものののだらう。

### 急流もどく吹く風

ピッサヌロークの郊外、新しい村



浮き家に住む人たちを、まるごと移住させる計画のもとに建設中の集落。お邪魔した家には真新しい家具があり、すべての持ち物がきれいに納まっていた。床に広げる平面収納から立体収納への変化と、がらんどうの白い部屋が強く印象に残つた。



左上：アユタヤーの環状水路に面した高床式住居。他はその内部写真。  
 左：家が傾いているので、腰高に残る大洪水の痕が、奥に行くにしたがってはいよいよ高くなっているように見える。  
 上：正面扉についた水の痕が、左の写真より低く見えるのは、床の高さが違うからだ。



が移住者たちを迎え入れている。番地がナン川の浮き家集落とまったく同じ、つまり、浮き家の住人たちが引越してきているのだ。川ではなく道路に沿った建物群は、プロック壁に鉄骨と合板の小屋根組みを乗せたようなもの。タイの伝統を受け継いだ部分は見当たらない。建物だけを見れば、同じ造りが幾つも見られ、日本の新興住宅街と似た風景だ。ところが、その使われ方が違う。と言うより浮き家の生活スタイルがそのまま残されている。掘で囲まれている、住宅と道路のわずかな空間にテーブルとベンチがあって、大人たちはお喋りをしている。子どもたち3人が頭を寄せてノートを広げているのも、チョット離れたところにシヤモの籠があるのも、昨日、川で見たシーンと同じ。それはそうだ、簡単に生活が変わるはずがない。小高く土盛りされたこの村でも、「昨年の水はここまでできたよ」とおばあさん。「いざとなったら、2階があるから平気」。絶対に浸水しない家から引越してきた割には、悠長な答えだ。

上がる。「床の高さをもっと高くすればいいんじゃないの」と言っても「普段はこれで充分」との返事。「別に命がなくなるわけでもないのに、大げさだな」とても言いたげな顔をする。

高床の住人は、大洪水に備えて床を高くすることはしない。否、実は長い年月を経て高くしてきたのだ。床を高くすれば階段の数が増えて登り降りに苦労する。できるだけ高くはしたくない気持ちと、水に浸かりたくない気持ちのバランスが、床の高さを決めてきたはずだ。その条件の中には、7年前の大洪水に近いものもあつたはずだが、そうしたケアーは例外として見なされ、高さの決定には考慮されていない。私たちの感覚と比べると、仕方のないものと判断されるケースがとんでもないうだ。

熱心な仏教徒の多いタイの人は、会つと必ず手を合わせて笑顔で迎えてくれる。分かれるときも同様で、仏の加護を祈って再び手を合わせる。失つて惜しむものをほとんど持たずに、余裕の笑顔を浮かべるタイの水上生活と、守りの態勢を模索する今の日本とタイの大都市バンコク。

悠々と生きるためには、例外に対して「仕方がない」と納得する度量を備えることが必要なのかもしれない。そんなことを、タイの伝統的な暮らしから教えられた気がする。



家の前は勉強、シヤモの世話、お喋り、昼寝など、卓袱台的な空間がごく自然に生まれていた。



# 輪中の智恵を伝える リスクコミュニケーション

木曾三川の「輪中根性」を「水防文化」に昇華する

長島、大垣は、ともに木曾三川によるデルタ地帯に広がる輪中の地として知られる所。輪中といえば、小学校のときに習った「堤防に囲まれた、水屋のある家々」を思い出すが、実はそんな数行の説明では語りきれない、多くの示唆に富んだ歴史の舞台でもある。

三重県長島町「輪中の郷」で、古くから伝わる輪中の智恵を伝えている諸戸靖さんと、岐阜県大垣市で「大垣輪中」というホームページを作り上げた、大垣市立赤坂小学校教諭の近藤満さんの働きを通して、現代に生かせる輪中の智恵を学びたい。

岐阜県大垣市立  
赤坂小学校教諭  
近藤 満さん



三重県長島町  
「輪中の郷」  
諸戸 靖さん



## 輪中の堤は徐々に成長してきた

### 5. その後

中堤は交通の障害になるので撤去したところもあるが、細い道路とともに現存し、伊勢湾台風では、氾濫の力を弱める働きをした。住宅が中堤の上に並ぶ風景は、列状集落とも呼ばれる。

(長島町輪中の郷資料より)

### 4. 懸回堤

かけまわりづつみ  
江戸時代になると新田開発が盛んになり、いくつかの小さな輪中を取り囲んで堤を造り、大きな輪中となった。この堤が懸回堤で、もとの輪中の堤は、中堤として残った。

### 3. 潮（塩）除堤

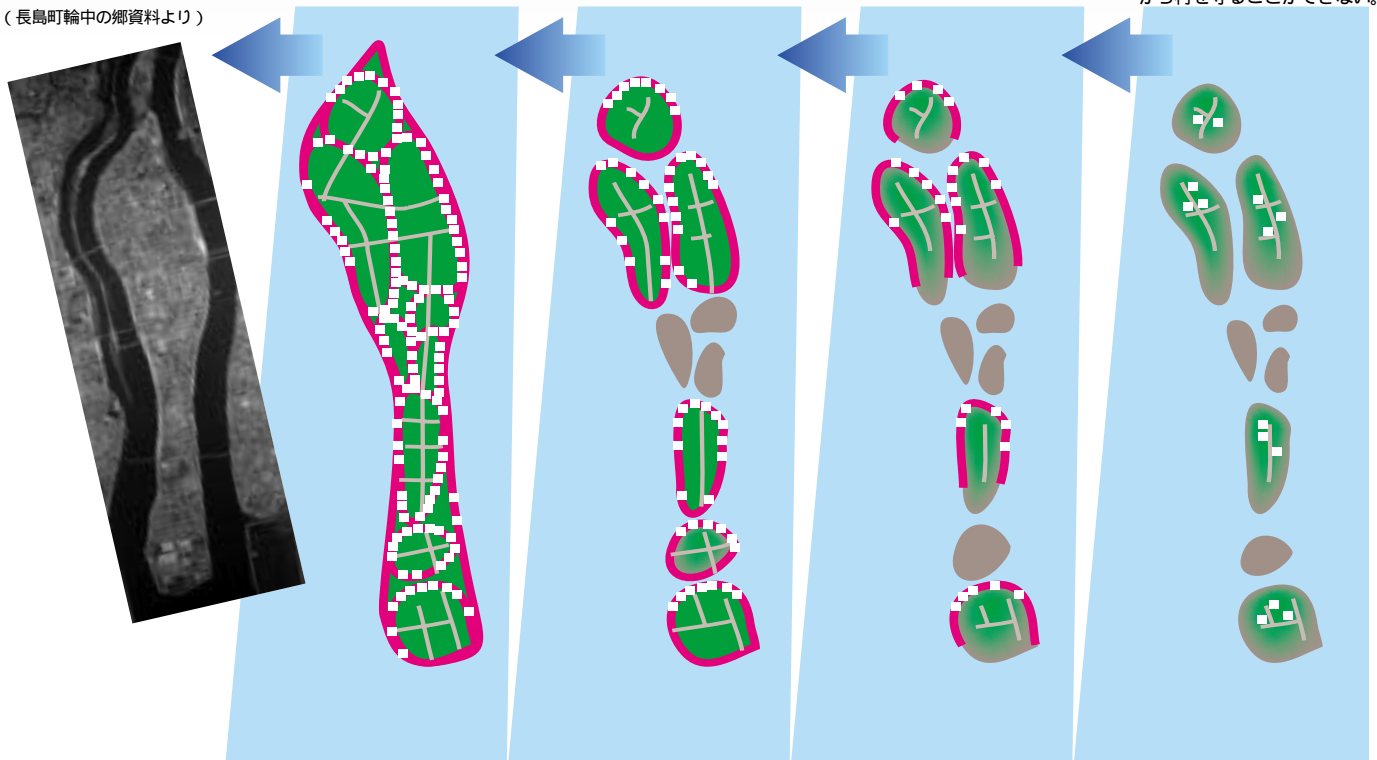
しおよけづつみ  
尻無し堤に囲まれた水田は、下流の海水の進入に悩まされるので、下流を堤防で塞いだ。これが現在の輪中のもととなる潮除堤である。

### 2. 尻無し堤

上流側に、逆V字型の堤防を造る。住居は高くなった堤防の上に建築された。この段階では下流側には堤防が造られていなかったのが尻無し堤と呼ばれる。

### 1. 自然堤

長島のような低湿地帯には、洪水のたびに川岸に多量の土砂が運ばれた。人々は土砂が堆積して高くなった所に住み、高畑をつくり村をつかった。ただ、これでは洪水の時に上流から来る冠水（かぶりみず）から村を守ることができない。





海拔0m地帯である長島では、短冊形に土を積み上げて「掘り上げ田」を作って、稲作が行われた。溝状の池の部分は掘漕れと呼ばれ、かつては田舟が行き来していた。冬の裏作時の畑は、掘り上げ田の上にさらに高い畝を作り、田圃とした(くね田)、人力でのきつい労働は「嫁殺し」とも言われた。



1997年の長島  
木曾三川を跨ぐ橋は上から、東名阪自動車道、鉄道、国道1号、西側だけが損斐川と合流する直前に長良川の河口堰、国道23号。



1959年(昭和34)9月26日伊勢湾台風が上陸。夜8時すぎに高潮、暴風雨が最高に達し、堤防が13カ所で欠壊。「どこか堤防が切れたら、堤防に逃げろ」の言葉通り、中堤が残った。  
翌1960年より地盤沈下が急速に進行し、0m地帯はさらに広がった。このため排水設備の建設や堤防の強化改修が行われ、伊勢湾台風級の災害に耐えられるように備えた。

## 輪中は水防共同体

輪中という言葉だけなら、おそらく誰も知っているにちがいない。小学校の社会科で、知識としてなら記憶に止めているからである。しかし、「輪中って何?」と改めて子供から質問されたとき、正確に答えられる大人はあまりいないのではないだろうか。

輪中とは、「低湿地にある集落と農地とを含む<sup>ないうみ</sup>囲堤を持ち、外水や内水を統制する水防共同体やその範囲」と定義されている。つまり、堤防に守られた「土地空間」と、それを守る「人々の協力組織」の両方を表す言葉なのである。

長島町「輪中の郷」に務め、長年調査や解説役を務めてきた諸戸靖さんは、見学に来る子どもたちに「輪中とは、住む人が手をつないで輪になって守ってきた所」と説明するそうだ。

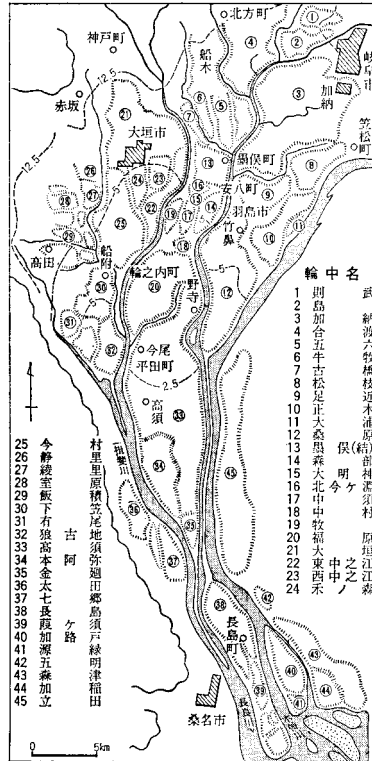
長島町は長良川、損斐川と木曾川の両河口にはさまれた中州のような地域で、人口約1万5千人の町。ゼロメートル地帯の土地に農地が広がっているように見えるが、今や第一次産業に携わるのは全就業人口の1割にすぎない。

長島という地名からもわかる通り、戦国時代末期、ここは文字通り島であった。河口の物資集散地として、また一向一揆の拠点として知られるが、織田信長が攻めたということは長島町が富と力を蓄えた要地であったという証でもある。

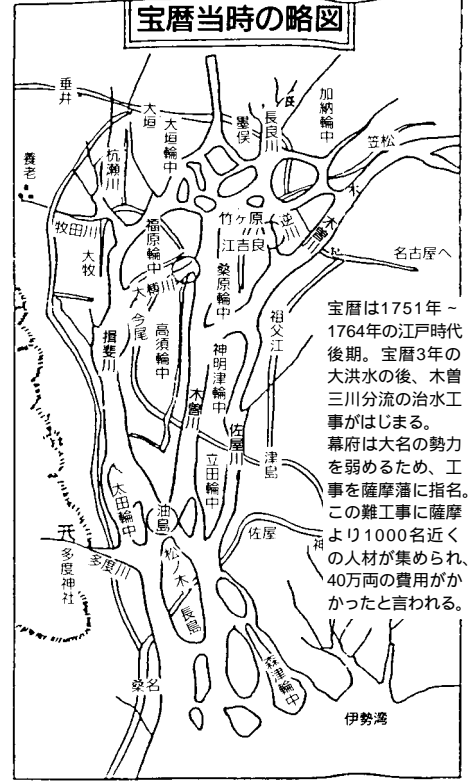
「輪中」というく、堤防に囲まれた土地と小学校では教えられますが、そ



「輪中の郷」の近くにある、水屋を持つ農家。  
上：正面左手、屋敷林で囲まれた建物が水屋。輪中の地面は砂地だったため、木が生えない。貴重な土を盛って作った水屋の土台の週りに屋敷林を作ることは、薪の確保のために至極合理的なことであった。  
左：母家側から見た水屋。水が引くまでの間の生活必需品を、水屋に備えるのはもちろんだが、一番大切なのは種籾であった。  
下：裏手。



木曾輪中群 (小出博著『日本の河川』東京大学出版会 昭和49年)



これは正確ではないと思います。堤防内側ではなく、堤防の上に人々が居を構え、内側に田畑を作った。堤防で囲まれた土地がだんだんとつながっていくと、輪中は広がり、もともと堤防の上に立っていた集落が列状に残るわけです。そして、江戸時代までには、長島の原型が形作られました」と諸戸さんは言っています。

確かに、航空写真を見ると、集落の形状と堤防の形がくっきりと重なる。車で町内を走ったとき、ずいぶん道が細いと感じたのは、実はかつての堤防の上に載った住居群だったのだ。

なぜこのような低地で、常に洪水の危険にさらされながら、人々はわざわざ堤を作ってまで移り住んだのだろうか。

「水に困らない土地というのは、生きていく上で最も重要な問題が解決されているということ。このあたりは砂地で水はけが良い。洪水の危険はありますが、それは同時に上流から土が運ばれてくることでもある。肥沃な土地ということ。江戸時代には、一反(991・7m<sup>2</sup>)あたり3俵から5俵の米が取れました。洪水の翌年は、それが倍以上に増えたといえます。それだけ、恵みを運んでくる川だったのです。しかも三年一作、五年一作といわれ、3年に1回の収穫で豊作、5年に1回収穫できたら並、といわれるほどのペースで食糧から種籾までをまかっていたのですから、収穫量は大変多かったのです。

さらに、このあたりは水運の要地で商業も盛んだったはず。陸上輸送が盛んになるまでは木曾檜も運ばれていましたし、揖斐川町や、恵那からも荷物が運ばれてきたようですからね。」

長島は、さまざまな恵みを受け取りやすい土地でもあったようだ。

**水防共同体の記憶**

とはいっても、江戸時代にはたびたび輪中堤が切れ、田畑が水に浸かった。

「確かに、大変な苦労だったと思います。堤防というのは、いきなり切れるのではなく、決壊しそうなになると、堤防の内側から水が染み出てきます。この段階になったら、みんな避難します。洪水も一挙に濁流に飲み込まれるというのではなく、徐々に水が寄せてくるというものです。ですから、長島には『堤防切れたら、イモ洗い』という言い伝えがあります。堤防が切れる兆候が出たら、水が来るまでの間に食糧の用意をしておけという意味で、その程度の時間的余裕はあったようです。これは長島の立地が河口に近いということがあります。上流でしたら当然状況は違ってきます。長島が河口に近いということでもうひとつ助かったのは、潮の満ち引きを利用できるということ。普通、田圃は水を引くことが問題となりますが、輪中では排水が問題になる。もっと上流の輪中では排水のための苦労がなされるのですが、長島では潮の干満で移動する淡水が利用できるため、他の地域よりは楽でした。」

ここに暮らす人たちは、度重なる



三重県長島町「輪中の郷」  
輪中の歴史や伊勢湾台風の記録は、写真や模型で時間を追って理解できるよう、詳しく展示されている。  
下中：防災備品の中には堤防を補修する道具もある。非常食は新開発のフリーズドライ食品で、保存期間が長く、味も良いとのこと。  
左：展示されている水屋は、実際のを移築。内壁は板張りで、備蓄品の調湿と防虫のために、隙間に和紙が貼られた。  
下右：昔の生活用具の保存状態がいいのは、水屋に仕舞われたまま忘れ去られたものが多いから。捨てる寸前まで使い込まれたものではないためだ。  
「輪中の郷」の入口にも、海拔に加え、伊勢湾台風時の水位を表示するポールが立つ。これは長島町内の随所があり、水防意識を高めるようにそびえ立っている。



輪中の郷のホームページは  
<http://www.mint.or.jp/nagashima/html/page072.htm>



危機体験には、どんな意識で対したのだろうか。  
「こういう土地に住んでいる人間でない」と、実感することは難しいと思いますが、水かさが増えたと同時に、対岸より一つでも多く土嚢を積めば、自分の土地、財産を守ることができる。どこかで堤防が切れば途端に水は引いて、自分の所は助かる。これは紛れもない事実で、輪中根性とも呼ばれます。そのため、堤を守るための共同意識は強固です。上流の輪中には水防小屋があり、危険が迫るとみんなが駆けつけるのですが、どんな事情であれ、その場に駆けつけられなかった者は罰則を受けます。  
また、『力石』という成人儀礼があって、重い石や米俵をかつきこれを持ち上げられたら、共同体の一員として認められました。長島の子供として認められるにも、通過儀礼がありました。木曾川の中州の工を採ってくるというテストなのです。中州まで片道約500m。これをバスで走らなければ、長島の子供にはなれないということです。

良くも悪くも、災害時の高揚感があることは事実です。普段は娯楽がない生活でしたから、日常の憂さを発散するために、遊廓や博打が盛んになるという側面もありました。  
1896年(明治29年)のデ・レーケによる明治改修の後、この地域は1959年の伊勢湾台風による高潮まで、水に浸かることはなかった。約60年間水害から遠ざかり、多くの住民は「もう堤が切れることはないだろう」と思っていたという。そこに襲ってきたのが、伊勢湾台風だった。  
伊勢湾台風は上流からの洪水というよりも、伊勢湾からの高潮被害が甚大で、それまでの体験を超えるものだった。台風が通過した9月26日、名古屋の時間雨量は40・70mm、最高潮位は5・81mを記録。26日午後8時30分ごろに、長島の堤防は13ヶ所が決壊、町内は大洪水となり、27日までは全町が水に沈んだ。  
伊勢湾台風は最悪の条件が重なったこと、普通上流から切れる堤防が下流から切れたということ、今までの経験が生かせなかったため、被害も例外的に大きなものとなった。死者383名を出す大惨事で、当時水防番をしていた人は、「じわじわ来た水は防ぐことができる。ただ、伊勢湾台風のとときの高潮は、山が落ちてきたように見えた。津波よりもはるかに恐ろしかった」と後で話したそうである。  
長島には、堤防が切れたら、堤防に逃げる」といいたい伝えがある。堤防が一番高い場所だから、堤防上が一番安全なのだ。また、輪中では洪水が出たら雨戸を全部開け放つのが常識であったが、過去に水害の経験がなく、家を守るうとして雨戸を内側から押さえていた人は命を失ったという。伊勢湾台風のとときも、過去の教訓を知るお年寄りがいた家族では、大きな被害に至らなかったという。



対岸は中洲で、千本松原の松並木と呼ばれる。宝暦治水の薩摩藩士を記念して植えられた日向松の並木。手前が長良川、その向こうが揖斐川。



大垣市立赤坂小学校  
<http://www.city.ogaki.gifu.jp/edu/akasyo/index/index.html>

左下：赤坂小学校は、少子化によって空いた教室を資料室として有効に利用している。近藤先生が指さしているのは、平成3年度の卒業生が作った、赤坂町のジオラマ。大変よくできているので、後輩たちが自分の町を把握するために、今も大切に保存されている。右：床に座って展示発表の作品を描く、4年生。自分たちの町に美しい水が豊かであることを、子供たちは誇りに思っている。水鳥や虫など、興味を持ったテーマを決めて、グループで調べたことを構造物にまとめて発表する。



## 水防の智慧を伝えるために

その伊勢湾台風からも、40年あまりがたつた。長島町の堤防は、あれ以来さらに高くなり、1回も水に浸かっていない。堤防の横に建つ、建て売り住宅なども目立つようになっ  
てきているが、前の町長は、水防活動に支障が出るから団地などは造らない方針だった。名古屋のベッドタウンとしては都合のいい立地ではあるが、無責任に人口を増やすことを戒めている。

水防意識を育てるために、諸戸さんが大切と考えているものは何か。

「1976年（昭和51）の安八水害の前と後では、水防意識が決定的に違います。これだけ水防意識が高いはずの地域でも、長い間水害が起きないと危機意識が薄れてしまつてです。ですから、まったく水害を経験したことがない人が移り住んできて水防の意識も低かつたらもしもの時に危険だと思えます。」

しかし、一番大切なことは、堤防を毎日見ること。いたずらに危機感を煽っても仕方がありませんから。毎日堤防を見れば、今どれぐらいの水位なのか、堤防の状態が変わりなのか、といったことがわかると思えます。第二は、水害が迫ったら他人をあてにせず、自分たちで何ができるかを考えてほしい。水防活動は、いざとなったら人海戦術、協力しようという意識が大切なんです。」

諸戸さんの懸念は、都市にも広がる。「長島が特別な場所というのではな

いのです。都市でも同じことが言えるということ。特に、都市部では避難所が一番の低地に設定されていることなど、さらにあります。国や業者の責任を追究しても、なくしてしまつたら命も財産も戻らないのですから、自らの手で守らなくてはなりません。水がくる危険性のある場所ならばどこであれ、輪中の智慧で、もう一度水と対峙してもらいたい。輪中を水防共同体として捉え直すと、輪中の智慧は、全国の水防対策に貢献できるのではないでしょう

## 輪中根性にも、目を逸らさない

伊勢長島の上流にあたる輪中地帯が、水の都と言われる大垣市。揖斐川に程近いこのあたりは、現在でも毎年のように浸水被害に見舞われている。この土地で、「大垣輪中」という小学生向けホームページを制作公開し、子供たちに輪中の智慧を伝えていくのが、地元で生まれ育ち、現在は大垣市立赤坂小学校の社会科教師である、近藤満さん。

ホームページは、「輪中マップ」「大垣を襲った大水」「水をおさめる」といったページから構成されている。輪中マップを開けると、大垣市内の地図をベースに、「水屋」「決壊碑」「水防倉庫」「水神」「伏せ越し」「排水機場」の位置が表示されるようになっており、クリックするとその情報が表れる。輪中文化を記した地図は、一種のハザードマップとしても解釈することができる。



## 輪中の智恵を伝えるリスクコミュニケーション

「水をおさめる」では、清水五右衛門、ヨハネス・デ・レーケ、平田鞆貞、伊藤伝右衛門、金森吉次郎といった、治水に尽力した偉人の業績を紹介している。

なかでも、近藤さんが注目したのが、金森吉治郎（1864年〜1930年）である。大垣市に生まれ、一生を治山治水に捧げ、1896（明治29）年の大洪水では、横曽根の堤防の切り割りを決断し、8000戸の家と40000人の人命を救った人物である。1889年（明治24年）の濃尾地震による山林崩壊が大垣の洪水の原因となっていると考え、「水を治むるもとは山を治むるにあり」と、揖斐川上流の工事や山の植林を進め、1898（明治31）年に



近藤さんがつくったホームページ「大垣の輪中」  
<http://www.city.ogaki.gifu.jp/edu/open/kdata/waju/index.htm>

は、森林法を作らせて1億8000万本の植林を行った。

近藤さんは、「こう言っ。輪中根性をこ存じでしょう。私は墨俣出身ですが、高校生のとき長良川が決壊し、まわりの大人が一瞬フワツとした顔をしたのを覚えていんです。下流が決壊したので、ここは大丈夫だという安堵感が顔に出たのでしょうか。それが良いことだとは決して言えないけれど、そういう気持ちを抑すのではなく、ほっとするの人間、でも他人を思いやるのも同じ人間だと、子供たちに伝えていきたい」

ただ、かつて「堤の高さ競いや、切り合い」の歴史があったように、目を広域の治水に転じたとき、輪中



同士の折り合いをつける必要が出てくる。

金森吉治郎は、大垣の洪水を救うために、上流の植林を進めました。議員をしていたので、目先の堤防の強化をすれば集票にも役立つはずなのであってそれをせず、大垣以外の治水のことも考えて、上流で小さな苗木を植えることから始める。未来に焦点を据えた、こういう生き方もあるわけです。輪中ではなく、水の都全体を考えるならば、もう一つ思いを高くして、高い次元から考えることがどうしても必要となる。それを、子供たちにわかってほしいのです」

近藤さんはHPを使って、金森吉治郎のケースを題材に、輪中につい

て小学校4年生に考えてもらったそうだ。みんなが悩んで出した結論は「今はよくわからない。けれど、これからはよくわかっていく」。大垣市は都市化が進んでいるので、自分たちがどんな地域に住んでいるかが見えにくくなっている。子供たちは「水の都」としての地域を、蜚がいる、魚が棲む、水鳥がやってくるなどといったプラスのイメージでとらえているが、これも優れた先人の業績のお蔭だ。先人の智恵を見直すことで、子供たちにも住民としての意識を高めてほしい、と近藤さんは言う。

「輪中を例にすると、住む人の『感情』と、あるべき方向の『理解』という、両方を教えることになりました。教科書には建前の部分しか書いていないのですが、家に帰って、おじいさんに『なぜ大垣全体で、水を防ぐ協力できないのか』と尋ねると『そうは言うても...』と本音の答えにぶつかることになりました。自分の地域を愛し、守ること。そして、なおかつ自分のことだけを考えない、という2つの視点を持つことのできる大人に育ってほしいと思います」

大垣と長良川。同じ長良川、揖斐川の上流・下流といっても地勢は違い、輪中に居住する人々の考え方や協力関係、水防への眼差しも違ってくる。良くも悪くも、「輪中根性」と呼ばれる地元根付いたものの見方や慣習を知ることなしには、将来に向けた水防協力関係を作ることはできない。近藤さんの話は、この点をよく表しているようである。

大垣が都市化したおかげで、いつものまにか自分たちの住んでいる土地が輪中の中にあるということを知らない子供や家族が多くいるという。そんな中で、ホームページによる大垣輪中の情報提供は、緊急時の対応を学ぶ上でも、大きな意味を持つことだろう。自分たちが水に浸かる可能性の高い土地に住んでいると知ったとき、子供たちは「自分で、どのように水害への備えをすればよいのか」考えるきっかけとなるだろう。

輪中の智恵を伝えるという水の文化学習は、水防文化を伝え、新しい時代の水防文化を創るきっかけとなっている。

サーバー上の教材は、  
 リスクコミュニケーション  
 としても有効

昨年から総合学習が導入され、近藤さんが作ったホームページにも、大垣市の全学校でアクセスし、教材として使用できるようになっている。地区、地域の歴史、習慣や情報を蓄積して、アクセスした人が自分の目で情報を見直してみる。こうした作業にホームページは最適だ。

近藤さんの作ったホームページは子供たちだけでなく、家庭で大垣輪中のことを考えてもらうきっかけともなった。金森吉治郎が、広く長い視野で考えた水防を、現在はホームページを見た人々が、みんなで作ることができるよう条件が整ってきているのだ。



# 水を治める力

## 親水空間は浸水空間

「戌の満水」と呼ばれる歴史的事件がある。徳川吉宗による享保の改革のただ中、寛保2年（1742）の出来事である。この年の7月末から8月初めにかけて、超大型台風が關八州、越後、信濃、甲斐を直撃し、江戸期で最悪と言われた大水害を引き起こしたのだ。この寛保水害の年が、旧暦で壬戌に当たることから、後年、「戌の満水」と呼ばれるようになったのである。

松代藩の善光寺平では氾濫した千曲川の水かささが6mを越えた。利根川の中条堤（現 埼玉県行田市）が切れ、5日後に濁流が江戸に達した。当時の深川は、江戸川と隅田川を結ぶ水路が縦横に巡らされていたが水路からあふれた水で軒先まで水に浸かり、町人は屋根に逃れたという。高崎哲郎『天、一切ヲ流ス』（鹿島出版会、2001）にはこの事件のことがくわしく記されている。また



当時の絵図とその後に起きた信州の水害写真を併せて洪水の実像に迫っているのが、信濃毎日新聞社編『「戌の満水」を歩く』（2002）だ。

洪水の危険性は、現代でも変わらない。

2000年9月の東海水害では、愛知県を中心に台風14号による集中

豪雨に襲われ、総雨量567mm、床上浸水2万6500戸、床下浸水3万8900戸と、伊勢湾台風（1959年）に次ぐ被害に見舞われた。世界を見ても、1988年〜97年の世界の自然災害による死者数39万人の内、58%を洪水被害が占め、経済的損失7000億ドルの内33%を洪水が占めているのである。

日本の地勢と気候では、川の近くに居を構えることは、農業生産や商業流通、さらには安い不動産価格など、多くの利便が得られる空間を選ぶことである。しかし同時に、水害の危険性を選ぶことでもあるのだ。

つまり「親水空間」は「浸水空間」でもあった。最近では治水が行き届いているためか、大規模浸水に襲われる頻度は低くなってきているものの、洪水の恐ろしさに変わりはない。そこで、タイである。タイの雨期特に毎年9月〜11月ごろには、現在でも広範に渡り水に浸る。

道も、田畑も、市場も、住宅や商店も、毎年のように水に浸かる。

しかし、水がくると「またか」と土囊を積み、道の上に板を渡している。どうも「抗がっつてもしようがない」と、水に浸かりながら「やりすぎし」、毎年同じことを繰り返しているという印象を受ける。浸水と闘うわけでもなく、といって、共に生きるという強い覚悟があるわけでもなさそうだ。毎年やってくるものに寛容に構えているようにもとれる。

昨年は例年になく水害の激しい年で、昨年10月10日時点の調査で、死亡者128名、家屋の被害が約6万4000件にも上った。

にもかかわらず、この浸水に対する感覚差は、日本と対称的だ。この感覚差を出発点に、「浸水へのリスク感覚と水防意識」について考えてみたいと思う。

## 浸水を水害化させない

「こまで」「洪水」「水害」「浸水」という言葉を無造作に使ってきたが、意味をはっきりとさせておこう。

水があふれ出て被害が生じること、を、一般には「洪水が起きた」と言う。しかし、正確には、洪水とは「河川にふだんの何十倍から何百倍の水が流れる」という意味である。あふれようがあふれまいが関係ないそれが、あふれ「浸水」し被害を及ぼす災害と化すと、「水害」になる。洪水と水害は異なるのである。洪水は「流量」が問題となる点で自然現象に近いが、水害は「被害」という人の暮らしと密接に関わった社会的現象ともいえる。

浸水も、「あふれ出た水」と見ると、そのパターンもさまざま。タイのチャオプラヤ川中流〜下流域では、水はゆるゆると時間をかけて迫ってくる。ときには背丈ほどの深さになる地域もあるが、毎年毎年同じ時期に膝くらいまで水がくる。いわば「ゆるゆるの低水位型」だ。一方冒頭で紹介した戌の満水のように、またたく間に屋根ぐらいまで水が押し寄せてくるという「急速高水位型」もある。水位や押し寄せてくるスピード

ードによって、浸水への恐怖感も、記憶も変わってくる。

一方、同じ浸水も「水害」という側面から見ると解釈は変わってくる。誰も住まない荒涼とした土地が急速かつ広範囲に浸水しても、ほとんど水害にはならないが、バンコクや東京の中心地がゆるゆると浸水すれば、たとえそれが狭い範囲でもそれは大きな水害となることだろう。

そこで、水害の危険を未然に「抑止」するためには、あふれさせないことが一番わかりやすい。現に、日本ではこれまで再三言われてきたように、堤防を高くし、ダムを造り流量をコントロールしてきた。しかし、いったん起こった浸水をいかに水害に転化させないか、あるいは小さな水害に止めるかという「被害軽減」については、意外と忘れられやすいものである。

実際に水害の被害に遭うのは、河川管理者でなければ国でもない。そこに暮らす居住者だ。ならば他人任せにせず、当事者である自分たちで水害を軽減できるのかどうか、一度考えてみるのも悪くはない。

水害を防ぐには、3つのレベルがある。

第一には、「自分自身や家族をどう守るか」。水家のある家や、高床式住居を建てるのは、これにあたる。

第二は、「自分たちの地域、仲間をどう守るか」。これは居住者の協力の上に成り立つもので、このことは「水防」と呼ぶことができる。

水防活動は、一致団結すれば解決するというほど、単純なものではない。水防活動の結果、守られる地域

がある一方、反対に被害が及ぶ地域も出る可能性があるからだ。どこかの堤防が切れれば、他の地域は助かるというように、往々にして「あちらを立てば、こちら立たず」状態となる。水害の常襲地域で上流下流同士や対岸の間で対立があるのも、このような事情によるものだ。

第三は、「為政者が川を大局的にとらえてどう扱うか」というもので、これが「治水」である。

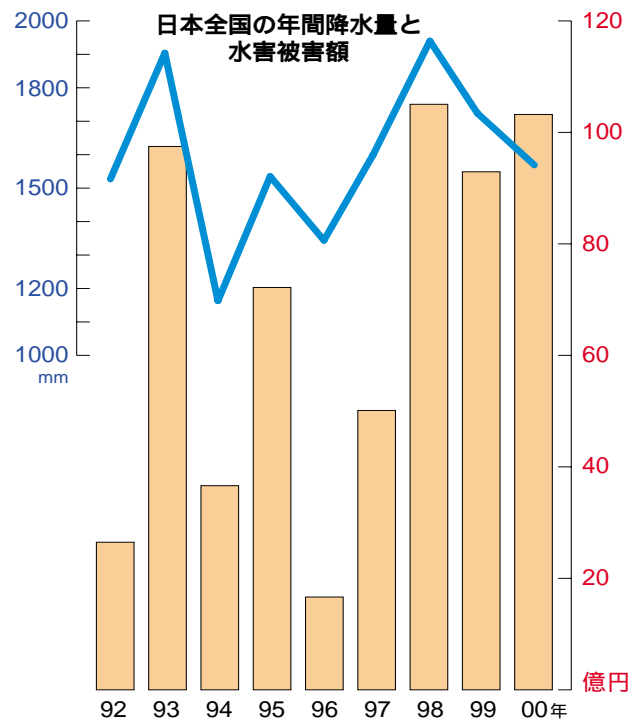


大熊孝「洪水と治水の河川史」水害の制圧から受容へ」（平凡社、1988）では、こうした区別を説明し、治水史を丹念に追っている。大熊は、力づくで「洪水を防ぐ」のではなく、計画を越える洪水はあえてあふれさせて、「水害を軽減する」こと、つまり「あふれても安全な治水」を目指すことを早くから提唱してきた。

実は、日本の治水政策も、最近ではこのような考え方に転換しつつある。浸水から身を守るにも、水防感覚を身につけることが、いよいよ現実に必要なようになってきているのである。

### 水防を考えるには、リスク感覚から

もし、仮に自分の住む土地が浸水



水害統計は国土交通省河川局によるもの

したら、どうだろう。そのような水害原因を招いた河川管理者を多分許せないのではないが、ローンが残っている土地や家が水に浸ってはたまらないし、電子機器類は濡れたら一巻の終わり。水が引いた後、悪い病気が流行したら大変だ。失うものが多すぎる。第一、そういうことにならないために、税金を払っているのではないか！ と思っても無理はない。

しかし、いったん立ち止まり、このような浸水についての理屈をよく解剖してみると、「浸水」を「水害」と感じる度合いは、水に浸かることで生じる「得失」と、浸水が起きるか否か、起きるとすれば、どの程度の頻度かという「不確実性」の感覚の2点に左右されることがわかる。この「得失が生じる不確実性への

感覚」をリスク感覚と呼ぶ。50年に1度程度でしか水害が起こらないと予想されても、そこで失われる財産がかけがえないものだと感じるのであれば、その水害は本人にとって当然リスクの高いものとなる。したがって、水防を考えるには、まず水害のリスク感覚から吟味しないと始まらないのである。

この個人のリスク感覚は、実は確固としたものではない。さまざまな影響でリスクの見積もりが違ってくる。最近明らかになってきている。

例えば、医者から命にかかわる手術を受けるか否かを迫られている患者は、「この手術の生存率は40%です」と言われるのと、「この手術の死亡率は60%です」と言われた場合とは、意味は同じでも、明らかに前

者を選ぶ人が多い。人は、損失が出る枠組みで話されるとリスク回避行動を取るが、利益を得る枠組みで情報を与えられるとリスク選好行動を取る。これは「枠組み効果」と呼ばれる。

水害常襲地域に住む人々は、何度も同様の出来事を経験してきたがゆえに、水害のリスクを低く見積もる傾向があるという。このような心理的傾向を「ベテラン傾向」という。「慣れは気の緩みを生む」ということが。逆に、自分が経験したことのないリスクを高く見積もる傾向は「パージン傾向」と呼ぶ。また、大地震のように予想もできないほど破壊的な出来事が起きる可能性を、「そんなことは起きるまい」と低く見積もることを「楽観主義傾向」と呼ぶ。

つまり個人のリスク感覚は、過去の経験や所屬してきた社会環境等によって左右されるのである。このような心理的諸要素があるので、同じ災害でも「専門家」というベテランと、情報を持たない「素人」とではリスクへの評価が異なり、両者の意思疎通がうまくいかないという問題にもつながっていく。



文化人類学者と政策学者という、日本ではなかなかお目にかかれない組み合わせで書かれたメアリー・ダグラス&アロン・ウィルダフスキ

「リスクと文化」技術的・環境的  
リスクの選択について」

(University of California Press, 1983)は、1つした現象に早くから着目した著作だ。ダグラスとウィルダフスキーは、「リスク感覚は文化によって左右される」と述べている。リスク感覚は、誰もが持っている自然な感覚である。しかし、その度合いは社会的、文化的な要因によって左右されるというのである。

このように考えていくと、こと浸水に関する限り、タイ人と日本人のリスク感覚が明らかに異なることが浮かび上がってくる。その差をもたらし理由は、「雨期」という冒頭に述べた雨の降り方の違いによるものかもしれない。「水辺が好き」という民族的な心情を持ち出すことも面白いかもしれない。さらには、タイ人の持つ輪廻転生の宗教観、価値観から影響されているのかもと思つた。タイ人のライフスタイルを見てみると、災いのタネを前世に求める感覚と、浸水を受容する態度を結びつけたくなる誘惑にも駆られてしまう。

もちろん、浸水リスクの感覚差を生む原因については、推測するしかない。ただ、われわれ編集部が、現在のタイを歩き、日本と比較して考えさせられたことがある。それは、モーターリゼーションがもたらす、リスク感覚の変貌だ。

## リスクの大衆化

近代化は、まず鉄道とともに始まった。次なる変化は、自動車交通で大量生産・大量消費社会の幕開けを

告げるものでもあった。

整備された道路網の充実と自動車台数の増加は、地方にさまざまな商品をもたらす。暮らしを変え、人の流動化を促した。道路で結ばれた空間は、運送、取引コストの安い空間に変化し、さまざまな生産、販売活動の拠点となる。経済が成長すると大都市と過疎地が生まれ、所得格差も広がってくる。

以前、日本のあるホームレスの人がテレビで「貧乏になるといふことは、一つまた一つと家からモノがなくなっていくことです」と話していた。大量生産、大量消費社会になるということは、反対に、家の中にモノがあふれかえることだ。

このことを実感させてくれるのが、ピーター・メンツェル編『地球家族』世界30か国のふつ々の暮らし』



(TOTTO出版、1994)と、

斬新な写真集である。世界30か国の普通と思われる家族を訪ね、家財道具を戸外に全部出してもらい、家の前で家族とともに撮影した写真集だ。日本の家も掲載されているが、他の国に比べモノの多さは群を抜いている。タイの家族も掲載されているが、非常に対照的である。

モーターリゼーションは、モノを各

家庭に送り届け、富を生み出す源となる人、家屋、土地、機械などを次々に資産に変える。モノを貯め込むライフスタイルは、「失いたくない」ものを急速に増やしていく。

このような変化は、生命以外にも失いたくないものが増えるということと、リスク感覚が膨らむことでもある。

特に日本においては、多数の人間が何らかの資産を持ち、リスクは眷にあふれている。失いたくないモノが増えることが豊かになることとすれば、豊かさの大衆化は、まさにリスクの大衆化でもあるのだ。

さらにモーターリゼーションは、タイにおいてさえ水辺空間の価値を変えた。エジプトはナイルの賜物という言葉どおり、河の氾濫は豊かな土壌をもたらした。水上経済が華やかなころは、河辺や港は富の集積する魅力ある空間だった。タイ、チャオプラヤー川も、日本でも中世から近世までは同様であった。ところが、道路が整備され陸上流通が発達、さらに治水施設が整うと、水害の頻度も減り、水防の知識も失われてくる。浸水空間だった場所の記憶は失われただの親水空間に変わる。

モーターリゼーションという共通の波に飲み込まれた日本とタイだが、そのスピードは明らかに違っている。日本は1970年代までに、道路整備と基本的な治水対策をほぼ終えてしまった。タイの場合は、現在でもまだその途上にある。バンコクでは小さなタクシー、トゥクトゥクがうなりを上げているし、地方都市に行けば、自動車よりもオートバイのほ

うが多い。モーターリゼーションと治水対策は、ともに現在進行中といつてよいだろう。

雨期になると、チャオプラヤーデルタは、今でも毎年どこかが水に浸かる。人口の都市集中が著しく、地盤高が1m程度で地盤沈下も続くバンコク首都圏では、「水に浸かるのは嫌」という人や企業が増え、浸水は今やリスク要因となっている。この事態に答え、バンコク首都圏庁では排水機能の強化、低い堤防によりあふれさせることを前提としたパツファージョンの設定、都市開発の誘導などを打ち出している。

日本では、かつて、堤防を高くし、災害抑止に重点を置く治水対策を展開したが、タイでは周辺地域の遊水機能をできるかぎり保全し、水をうまくあふれさせることで洪水に対応しているのである。あまり資金がかげられないというタイの懐事情があるとしても、治水実現の方法の違いには考えさせられる。

## リスクはゼロにはならない

では、水害リスクを減らすにはどうすればよいのだろうか。

現在、重要と考えられているのがリスクコミュニケーションの充実である。リスクコミュニケーションとは「当事者(個人、団体、集団)間でのリスクについての情報や、意見をやりとりするプロセス」である。

従来は、例えば水害について熟知している専門家が住民に「説得や勧告」を行い、水害への態度を変えさせることがリスクコミュニケーション

の1つだと考えられていた。

しかし、現在では、水害の専門家も素人も、当事者同士がフェアな情報提供を行い合うことで、お互いの立場を理解し合い、リスクを軽減する合意に達することが重要であると考えられている。つまり、参加と自由な情報交換と合意形成がリスクコミュニケーションの本質であると考えるのだ。これらを入門書としてわかりやすく説明しているのが吉川肇子『リスクとつきあう』(有斐閣、2000)である。



したがって、水害が起こる前の情報共有は、被害を最小限に止めるためにも非常に重要だ。現在、多くの河川事務所のインターネットサーバー上で公開されているハザードマップはその一例といえる。

また、過去に起きた水害、治水の歴史を知ること、大いに有効だろう。宮村忠『水害』治水と水防の知恵』(中公新書、1985)は、そのような目で読むと、今なお新鮮である。さらに、治水・水防にあたった人物が、何を考えながらリスクを見積もり、治水の判断を行ったのかを、学校の学習題材として調べ、議論し、子どもの記憶に残していくことも、立派なリスクコミュニケーションである。



しかし水害のリスクは、軽減はできてもゼロにすることはできない。予期せぬ豪雨も発生する。治水が進めば浸水頻度は下がり、水害に対する知恵が忘れ去られ水防力が落ちるといって「治水と水防のパラドクス」も生じる。さらに、都市水害まで視野に入れるなら、そのリスクは決して小さいとは言えない。

地域の水防力を増すためには、リスクコミュニケーションを進めると同時に、当事者がどの程度リスクをとるかという、リスク配分のルールについても意識の共有を行う必要がある。

「要求する」社会から、「寛容」な社会へ

個々人が受け入れることのできるリスクは千差万別なため、地域や集団として水防のリスクをどの程度とればよいのか合意がとりにくいのは容易に想像がつくことだ。協力体制を作ろうとしても、なかなかまとまらずに機能しないことも多い。

一般に、一人一人が受け入れることのできるリスクが少ないほど、つまり、「何が何でも失いたくない」と思う度合いが高いほど、国や自治体が治水、水防対策にかける費用や

労力は高くなる。みんながリスクを引き受けることを拒めば、今まで通り国、自治体に水防を委託するのが面倒くさくなくてよいだろう。しかし、それでは当事者みんなが協力し納得を得ることはならないし、国や自治体もそのような財政負担にはもはや耐えられなくなってきた。

一方、自分たちで水防組織を機能させようと、昔の水防共同体の知恵をたまたまも、うまくいかないケースもある。例えば、区域の中でも堤防のすぐ下に住んでいる人と、河から離れた人とは、感じるリスクが違うのは当然だ。いったん堤防が切れば、みんなが水に浸かるとわかっていても、当事者みんなの要求に「甘受できる」リスクを探るのはなかなか骨の折れる仕事なのである。これは、水害だけではなく、地震などの自然災害、事故、企業の信用など、リスクが発生する場面では共通して言えることだ。

そこで、最近では「要求を甘受できるかどうか」ではなく、「自分が納得して、相手と包容し合えるのはどのレベルまでか」という「寛容」基準で、リスクについて話し合うことが合意形成には有効ではないかと考えられてきている。これを水害についてあてはめると、例えば、「A地区は何mの水害まで耐えられます」「B地区は工場が多いが何mまで大丈夫です」と案を出し合うのである。甘受できるレベルよりも、包容できるレベルの方がより身を削り合っているため、リスク配分の協力関係が得やすいのである。「あふれても安全な治水」の水防協

力体制を機能させていくには、このような「寛容」という水害リスク感覚への転換が必要で、それが制度づくりの思想となることが不可欠である。

このような「包容しあう社会」を考える上で、タイのケースは非常に示唆的だ。タイでは、年中行事のように浸水に対応しているが、水がきてもちよつとやそつとでは慌てず、かなり寛容に水に対してしている。そのことが社会的被害を押し下げ役割を果たしていると言えるのではないが、各々が「どこまで包容しあえるか」という寛容なリスク感覚を持って、我々自身の水防力は向上し、結果として社会全体としての水害被害は低くなるのかもしれない。

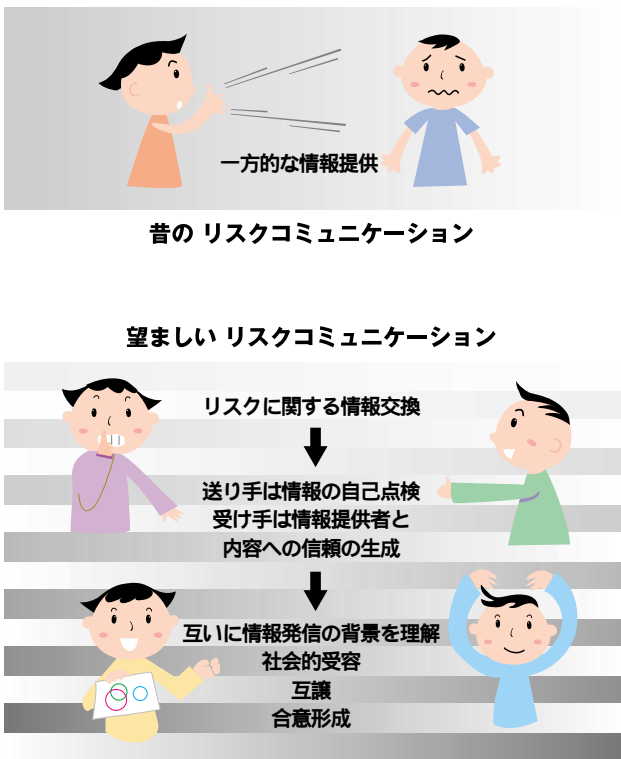
「水との共生」という甘い言葉も、寛容というリスク感覚の下での水と

のつきあい方を指す意味として使われていくならば、今後の水の文化を考える上で、重要なキーワードになっていくことだろう。

自分たち自身で

リスクを包容しあう社会をつくるためには、「自分たちのことは自分たちで決める」という自治の仕組みが欠かせない。これは、水害の側面から見た場合、抑止、軽減に結びつけるための条件でもある。専門家、素人にかかわらず、また、居住者、行政、企業という立場にとらわれず、互いに自由に意見を言い合い、水防にかかわっていく。このようなことがきちんと機能していくには何が必要なのだろう。

そこで大変参考になるのが、今回



取り上げた「水の文化楽習」の事例だ。木曾三川の輪中の取材の中で、地域の水防を考えるためには、自分たちの輪中根性も、未来を見据えて現在を見る心も両方が大事という話は、大変含蓄に富んでいる。輪中根性はいわば、「甘受できるリスクで物事を決める心」といつてもよい。堤防の高さを巡り、なかなか折り合いがつかないというように、これではなかなか合意が難しい。ならば、かつて大垣の治水家、金森吉治郎が実践したように、すぐに効果は出なくても、「気長」に「広い視野」で行動することも大事なのではないか。この水防意識こそが、水害のほとんど起こらなくなった現在、次の世代にも伝えられるべきリスク感覚なのではないだろうか。

この例は、「自分たち自身で未来をつくる手応えを持つこと」が、「現在のお互いがリスクに寛容になれる」ための重要な条件であるといえないだろうか。「他人任せではなく、自分たちが参加する」ということが、実はリスクに寛容となるためのポイントなのだ。

水害リスクは、地域で、経験で、個々人の心持ちで、それぞれ異なる。そのため、水防力は当事者のリスク感覚に左右される。これを機に、リスクという側面から、自分の住む地の水防力を高める手だてを、「自分たち自身で」考えてみたい。居住者が水を治めるとは、そういうことなのだろう。



# 微笑みの国 タイ

## 所澤さやか

タイの大会、バンコクに住んで驚いたのは、家では料理をしない人が圧倒的に多いということだ。日本でも最近ではコンビニエンスストアと安い外食産業の発達で、自宅にまな板がない人とか、包丁を持っていない人とか、がいて話題になっているが、バンコクの場合はそんな生易しいものではない。普通のアパートに、コンロがないのだ。これではお湯さえも沸かせないから、インスタントラーメンすら作れないことになる。では、キッチンには何があるかというと、流しのシンクがあるだけ。お湯ぐらい自分で沸かしたいという人は、このシンクの脇のスペースにガスコンロを持ち込むことになる。私を知る限りでは、どうもバンコクだけではなく、チェンマイなども同じような状況らしい。

私が住んでいるのは、住民の7割が外国人という集合住宅だから、電気のコンロが2口ついている。こういう例外を除いて、コンロを備えた、つまり普通の調理機能を持ったキッチンがあるのは、200㎡ぐらいの豪邸で、このキッチンはメイドさんのためのキッチンだから、やはり家庭の主婦は料理をしないことになる。

なぜ、こんな事態になったのだろう。  
そして、みんなはどこでごはんを食べているの？  
という疑問に答えてくれるのは、圧倒的な数を誇り、安くておいしい屋台の存在。バンコクの一般市民は、朝から家族総出で屋台でごはんを食べているのだ。

もちろんタイにもきちんと料理をする人はいるし、バンコク、チェンマイといった大都市のケースは例外なのかもしれない。しかしメニエーの選択肢も幅が広いため、

わざわざ食材を買ってきて自分で作るのが馬鹿馬鹿しくなってしまうのだ。実際、屋台で買ったほうがずっと安上がりである。例えばスーパーで野菜を買って炒め物を作るとだいたい材料費だけで40〜50パーツはかかるが、屋台で食べれば20〜30パーツくらいである。彼らは朝市で仕入れているから新鮮で安い食材が手に入るのだ。あまりに安く美味しいタイ料理が買えるので、こっちにいと家庭でタイ料理を作る気になれない。

タイでは、女性の社会進出がとて盛んだ。これが家で料理をしない習慣を助長しているのか、はたまた働く女性が多いから屋台が盛んになったのか？ 謎である。

料理はできたらやりたくない、と思っているタイ人も、こと入浴については相当に清潔好き。日本のようにバス・シャワーに入浴するのではなく、シャワーをさっと浴びるのだが、最低でも一日2回シャワーを使う習慣は、高温多湿の土地柄ではエチケット以上に快適なことだ。スーパーマーケットには、日本でもお馴染みのシャンプーや石鹸がずらりと並んでいる。先日知り合ったタイ人が、真冬に奈良に留学する娘さんのところを訪ねたとき、寝る前にやっぱりどうしてもシャワーを浴びたくて、夜中に寮の共有シャワーを使ったそう。部屋まで戻る途中、寒くて寒くて凍え死にそうになりながら、それでも毎日浴びてしまったと言っていた。昔は川で沐浴していた習慣が、シャワーに変わっても続けられているのは、やはりタイの人たちが清潔好きだからだろう。

タイ料理を自分で作る気にはなれない私だが、大の蕎麦好きの主人のリクエストで、よく蕎麦を茹でる。タイ



### 所澤さやか しょざわさやか

東京世田谷生まれ。  
1997年アジアの人材育成を手がけるNPO、Asia SEED入社、タイ人研修生のケアなどを行う。2001年10月より結婚を機にバンコク駐在。東南アジアのe-learningプロジェクトのコーディネーターとして各国の事情調査や調整を行っている。

に来たばかりのころ、蕎麦を作つてと言われた。お湯を沸かし準備をしていたら、彼が冷凍庫をがぼつと開けて、ひどくショックを受けているので何事かと思つたところ、「水が冷えてない!」。タイの水道水は年中生暖かいので、茹で上がった蕎麦を冷やすのに充分ではなく、主人のポリシーでは必ずお湯を沸かす前からミネラルウォーター（最後に口に入るものなので）を冷凍庫に入れて冷やし、そのお水でお蕎麦を冷やさないといけないということ。確かに、そのときは冷水が間に合わずに、そのまま水道水で蕎麦を洗つたけれどどうも味がしまらず、ぬるい蕎麦になつてしまつた。次回から主人のやり方でやつてみたところ、日本で作つていたよりおいしい蕎麦ができたので、蕎麦好きのこだわりを大いに納得した。

水温に限らず、水の性質も日本とはずいぶん違う。昨年タイに現地工場を作つて、国内用供給を始めた日本のビールメーカーも相当苦労したらしい。たまに日本のビールが懐かしくなる我々が試してみたところ、「ど、ど、どが日本のビール?」という味で大不評。なんでも日本の製法をそのまま持ち込んだため、水の違いでまったく上手くできなかったそう。その後、しばらくして、「ど、ど、ど、中瓶はおいしくないのに、小瓶と缶ビールはおいしい気がする。でも気のせいだよ」と言つていたところ、これらは工場が違うことが判明。土地ごとにつくり方を変えないとならないほど水が違うのか、と素材の重要性に感心してしまつた。でも、もしかするとクオリティコントロールの問題だつたりして。真相は謎である。

東南アジアに来て、よく言われるのが氷でお腹をこわすということ。タイの観光ガイドでも「氷は危ないので避けたほうがいい」と書いてあるけれど、普通のレストランではミネラルウォーターや沸かしたお湯から作つた水とかを使つているので、本当は心配ない（もちろん店によって違いがあるので、デリケートな人は注意して

ください。実はみんな氷にあたるんじゃないやなくて、あまりに辛いものを食べてお腹がびっくりしている、ということはあるけれどいい。

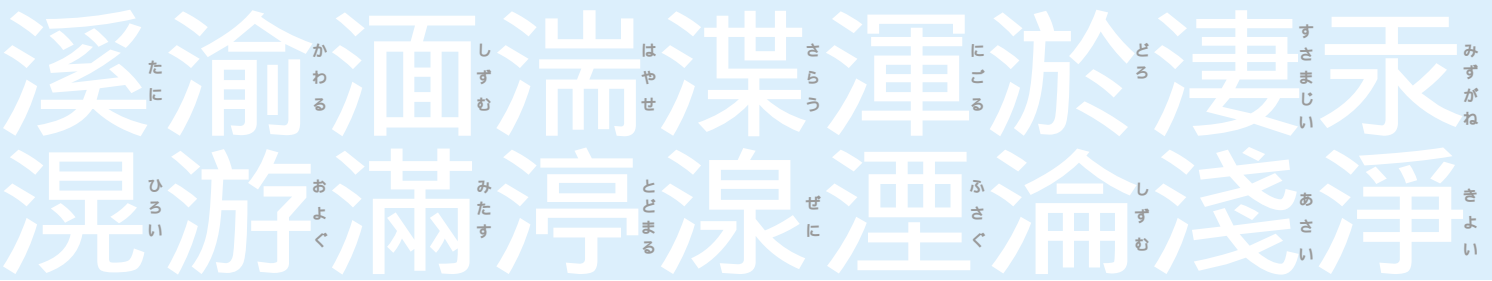
タイで一番メジャーなシンハービールなどは、味が濃いのでそのまま飲むと日本のテレビCMのように「ゴクッゴクッゴクッ...ぶはあー」ではなく、

「ゴクッゴクッゴクッ...ゲホッ!」となつてしまうので、氷を入れるくらいで丁度いいということがあり、何も言わないとビールに氷を入れられてしまう。日本人はびっくりして「やめてくれ」という人が多いけれど、そんなに神経質になる必要はないのだ。これは濃い味のビールを頃合いよく薄める役割のほか、屋台や屋外のお店で飲むときに、どんどん温度が上がつてしまつのを防いでくれる。慣れると、結構いけますよ。

争いを好まず、ニコニコしながら敵の矛先をかわすタイ人に囲まれていると、自分もどんどん同化しているようで、ちよつと「コワイ」。世界中にネットワークを広げる中国人ですら、タイ人の中に入ると自然に同化されてしまつたから、私が太刀打ちできる相手ではないと思つてあきらめるしかないのかも。

「微笑みの国、タイ」という言葉は、いまや観光ガイドブックの常套句になつているが、タイ人の微笑みは、敵を作らず、相手の懐に飛び込むことで無言実行してしまつのに、とても役立っているように思う。ボスのくだらない洒落に穏やかな微笑みを浮かべてくれたら、それはファン・イム。面白くなくても笑わなくてはいけない類の作り笑い。いくつにも分類されるほど種類の多いタイ人の微笑み。複雑で深いその微笑みが、じわじわと広がれば、世界に新しい価値観を生み出すパワーになるかもしれない。





# 水の文化書誌 ④ 《アジアの水》

アジアの国々は歴史、民族、気候とそれぞれ異なるものの、水の文化については、「水の神」、「水辺空間」、「灌漑農業」に関する書が数多く刊行されている。

那谷敏郎著『龍と蛇 ナーガ』（集英社、2000年）は、龍蛇ナーガ（インド神話に表れる大蛇・龍のことで、宇宙の最下層をなす冥界・水界・地下界を代表するといわれる）が統治者の権威の象徴となっており、さらには水の神としてアジアの人々の暮らしの中に息づいていることを著している。ネパールでは、少女の生き神であるクマリが、ナーガの首飾りをつけている。ナーガは雷による火災を避け、慈雨をもたらすものと崇められている。

スミット・ジウムサイ著『水の神ナーガ』（鹿島出版会、1992年）では、タイのバンコクを取り上げている。チャオプラヤー川、ターチン川、バーンコン川が運河で結ばれており、高床式木造による寺院の僧坊、講堂、経堂は水際に建立され、住民は移動可能な水上集落を形成、日常生活で水の神ナーガを敬い、水環境と調和した水辺文化をつくりだした、とある。

ナーガに関わるヨーロッパとアジアの比較については、勉強出版編集・発行『アジア遊学（第28号）』ドラゴン・ナーガ・龍（2001年）が興味を惹く。

水の神ナーガに守られたカンボジアのアンコール・ワット、アンコール・トムは12世紀から13世紀にかけて造営された宗教都城である。ベルナル・P・グロリエ著『西欧が見たアンコール』（連合出版1997年）は、これらの都を満々と水をたたえた水路網に囲まれた、巨大な水都市と位置づけている。この書の中で石澤良昭氏（上智大学教授）は、水利灌漑網により、年二毛作となり、高度な農業生産高がアンコール朝の繁栄をもたらしたが、さらなる寺院の建立のための過度な熱帯林の伐採と土地の開墾が、やがて降雨量の減少をまねき、森林の保水機能を失わせ、この結果、水利灌漑網の破綻をもたらし、隣国シヤム（タイ）に敗北したと相まっ

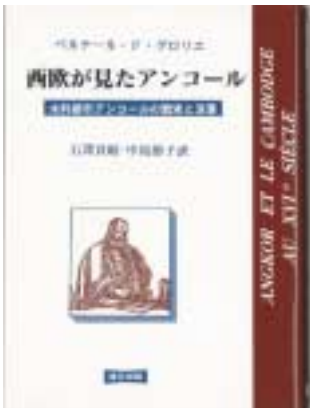
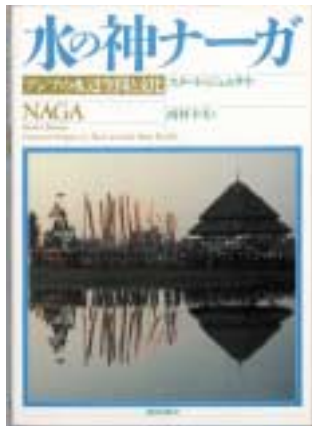
て、アンコール朝滅亡の一因となったのではないかと解説している。

藤田和子編『モンスーン・アジアの水と社会環境』（世界思想社、2002年）でも、アンコール朝の水利都市が考察されている。

カンボジアには、ボル・ポト派が引き起こした虐殺と飢えという、不幸な時代があった。清野真巨子著『禁じられた稲』（連合出版、2001年）には、1975年から78年にかけて、ボル・ポト政権が国民を巨大な貯水池、水路、堤防の建設に駆り出させ、伝統的な浮き稲栽培を禁止させたことある。この建設は、貧困脱却のため、アンコール朝の水利灌漑網による農業繁栄の再現を図ったものと著者は推論しているが、長大な水路建設は失敗に終わり、今でもほとんど使用不能のまま、全土に残っていると。

榎根勇著『水と女神の風土』（古今書院、2002年）は、ヒンドウー文明とサラスヴァティー女神バリ島の稲作社会とスリ女神を論じる。バリ島にはスパックという伝統的な水利システムがある。これは、取水堰からトンネル、水路、分水堰、末端水路まで水を公平に配分するための仕組みで、通常、共通の水源を有し、1つ以上の分水寺院を持ち、規約・水利組織を持ち、取水堰の近くに堰堤寺院がある場合が多い。取水堰や分水堰のわきに、必ず祭壇が造られ、水の神デワ・ヴィシヌヌが祀られている。また、水田の中にはあちこちに稲の神デワイ・スリを祀る小さな祭壇が設けられている。

家永泰光著『東南アジアの水』（アジア経済研究所1969年）では、スパックの定款規約が紹介されており、「組合員は寺を造り、水の神及び稲の神を祭らねばならぬ。植え付け前灌漑当初において祭りを行う」と記されている。さらに、植え付け後、年3回豊稔祈願祭を行い、祭りの費用はすべてスパックの負担と規定されている。このようにバリ人が水の神や稲の神を水利制度に取り入れ、敬愛する精神には驚かされる。  
さて、通商の拡大によって、アジアの沿岸部分には、物資の集産地、積み替え地、風待ち地、水の補







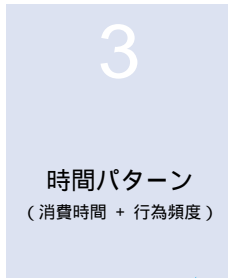
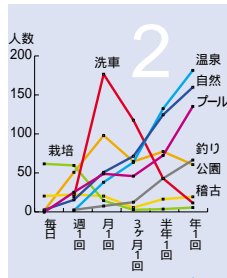
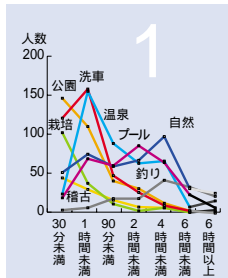
# データで読む水の文化 水にかかわる生活意識調査から

当センターでは、毎年6月に「水にかかわる生活意識調査」を東京、名古屋、大阪の約600名を対象に実施し、7月にその結果を公表しています。これまでの8年間の調査結果はセンターホームページでご覧いただくことができますが、このコーナーでは、ホームページに盛り込むことのできなかつた話題をご紹介します。

## 「水に接する行動」の時間グラフをつくってみました

2002年から、「水に接する行動」にどの程度の時間を割いているかを尋ねる質問を新たに加えました。すでに公表している「洗濯、入浴、掃除、トイレ」などの日常行為の他にも、次の8つの行為についても調べています。

1. 温泉に入る
2. 海や川など自然の水に接する（海水浴、川遊び、潮干狩りなど）
3. プールで泳ぐ、運動する、遊ぶ
4. 釣りをする
5. 自家菜園・レンタル農園での農作業
6. お茶、お花、陶芸などの水を使う趣味や稽古事（茶道、華道、陶芸など）
7. 自家用車の洗車（洗車用機械での洗車も含む）
8. 噴水や流水など公園や街中の水に接する



今回は、この8つの「水に接する行動」を、「水に接する1回当たりの時間」と「年間でその行動を行う頻度」から分類してみましょう。

図1：「水に接する行動」 最近行った一日を思い出し、何分ぐらい時間を割いたか答えてください。

図2：「水に接する行動」 1年間において、どの程度の頻度で行っていますか。

図3：「水に接する行動」の「時間パターン」(消費時間+行為頻度)

温泉 まず、それぞれの行為に、どの程度の『時間』をかけているのでしょうか(図1)。「自然の水に接する」人が万遍なく広がっていることがわかります。一方「温泉」などは、約4割の人が30分から1時間の入浴時間となっていますが、2時間以上お湯に浸かっている人もかなりいます。

プール それでは、時間だけではなく『頻度』を見てみましょう(図2)。

「プール」「自然」「温泉」は「年1回」が一番多く、ほぼ同じ傾向ですが、「洗車」「公園や街中で水に接する」とは異なります。さらに、「釣り」「稽古」とも違うことがわかります。

さて、『時間』や『頻度』を個々に見るだけではなく、両方を組み合わせた『時間パターン』を描くとどうでしょうか(図3)。

「釣り」のように「頻度は低い」が、いったん遊ぶときは時間をかけるものもあれば、「農作業」「稽古事」のように「日常的だが短時間」というものもあります。さらに、「洗車」「公園」はその中間です。

このように水に接する行為を「時間パターン」で見ると、行為の差が一目瞭然になります。このデータは都市部の暮らしを強く反映していますが、おそらく、海辺や山間部など地域による時間パターンの差もあることでしょう。

なぜこのような差が生まれるのか？ ライフスタイルの調査は、この問いから始まります。

温泉  
自然  
プール  
釣り  
稽古  
栽培  
公園  
洗車

温泉  
自然  
プール  
釣り  
稽古  
栽培  
公園  
洗車

## 水の文化14号予告

特集「京都の謎」(仮)

知られざる水の都市・京都。

祭り、商い、神社仏閣

脈々と伝わる水と言い伝え。

第3回世界水フォーラムの模様も伝えながら

京都の謎解きに「遊」びます。



日本の氾濫風景ではありません。  
バンコクの水路には電信柱があって、  
まるで日本の道路が冠水したように感じます。

自他ともに認めるタイ好きの私を癒してくれるのは、チャオプラヤ川のほとりでノンビリいたたく朝食。いつも優雅に流れているように見えた川には、その上での人々と水との密着したくらしがあることに初めて気づいた。バンコク駐在のママムに伝えたいものである。(ゆ)

バンコクに足を踏み入れて以来、タイ料理にはまり、本場「屋台」の味を探し求める今日このごろ。タイの研究者には怒られるかもしれないが、タイを通して日本の「水防とリスクコミュニケーション」を考えた。怖いモノ知らずの企画ではあるが、リスクを引き受けるには素人の総合力も大切と異国で実感させられた。(中)

## 水の文化

### Information

#### 里川情報の募集をしています

本誌では近く、暮らしと川とのかかわりに光をあてた「里川」(里山ではありません)の特集を企画しています。全国で里川活動に携わっている方の情報がありましたら、お寄せください。

#### 『水の文化』に関する情報をお寄せ下さい

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水との関わり」に焦点を当てた活動や調査・研究などをご紹介します。ユニークな水の文化学習活動を行っている、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究を行っている、こうした情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

#### 水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はモノクロで皆様に配布しておりますが、写真をはっきり見たい!というご要望にお応えし、11号からはホームページにてカラーでバックナンバーを提供しています。すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

#### ホームページアドレス

<http://www.mizu.gr.jp/>

#### 編集後記



水上バス停留所の浮棧橋(左)が陸(右)よりもはるかに高い。雨期の満潮時、バンコク市内は潮の影響を強く受ける。

水の文化学習で訪れた輪中地帯は、私の地元近く。何度も行っただけがあり、よく知っていると思いましたが、実は知らないことばかり。身近な所にも発見や驚きは多いものです。昨年11月に行った編集部のタイ取材では多くの方にお世話になりましたが、中でも、あちらこちらと尋ね回る妙な旅行者達の通訳を1週間に渡って努めていただいたトムさん、スワタナ氏のインタビュアーをアレンジしていただいた法政大学大学院・岩城考信さんにこの場を借りて御礼申し上げます。(日)

ミツカン水の文化センター機関誌

## 水の文化

第13号

ホームページアドレス  
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2003年(平成15年)2月

企画協力 嘉田由紀子 京都精華大学教授 琵琶湖博物館研究顧問 水と文化研究会世話役  
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会  
陣内秀信 法政大学教授

編集 小林 信 日比野容久 小林夕夏 中庭光彦 賀川一枝 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター  
〒475-8585 愛知県半田市 中村町2-6  
株式会社ミツカングループ本社 広報室内  
Tel. 0569(24)5087 Fax. 0569(24)6353

お問い合わせ ミツカン水の文化センター 東京事務局  
〒143-0016 東京都大田区大森北2-2-10・4F  
Tel. 03(5762)0244 Fax. 03(5762)0246



## ミツカン水の文化センター

表紙上：バンコクの北150kmシンブリー郊外の高床式住居。

表紙下：ロップリーの川に面した住居群は、ミカン箱のような足に板を渡した棧橋サバーンを雨期の生活道路にしている。

上：シンブリー附近は、雨期に街全体が水没するところがある。写真は水がほとんど退いた11月。

下左：バンコク、ノイ水路沿いの住居は、高床の上にもう一段、小さな床を作って水位の上昇に対処している。

下中：都市郊外では、テンダー（小さなボート）は木製が一般的だが、FRPや鉄板製もたまに見かける。盛り土した道路までと利用距離は非常に短くなったが、やはり雨期にはテンダーが必需品。

下右：砥石に水（黄バケツ）をかけて使うところは日本と同じ。砥石は粗砥と中砥を表裏に張り合わせたもの。砥粒が出てくるまでは研がないようだ。「石鯨（白ボール）をチョット使うのがコツよ」と彼女。この日は行事に備えてお寺の包丁に磨きをかけている。

